

布傳能麻近万珥

北布美覧一事聞しゆも筆よほりせ  
書り都於婆をゆふすく名つけしま  
ふとよゆる事ふとも思ひゆすきま  
ぬれはうち書きこと病くもひと多く  
都久波称のそとあてはよまけ山  
いやまけく八重津ちよみ屋戸のこだく  
人の見るもよしらせる

文化八坐せよゆの味 萱江ひすみよ

椎屋

筆隨意

管江真澄誌

ぬひまわちひ  
幸才  
ひひく河ひくよ  
十四才  
モはまくまのを  
十五才  
似き名こと  
十六才  
を波ひ  
十七才  
もせみ  
十八才

星の輪生木六才  
幸才  
かの源く冬れ  
十五才  
そめうら  
十六才  
いと也  
十七才  
をつ  
十八才

## あひの万み

久保田迦麻久良祭

## 菅江真澄誌

晋書の安寧ち集め高はと多板たに以、序と圓作三間表間  
署はり雪屋風引わしたむ如え角三雲表章重ね墨書きと筆傳  
禮撰さん祝辭をの紳と鎌倉府神の幡さむ往裏と幡等のものと目  
意の表裏依の表達を付すを三原半蔵もびとお筆記の筆傳と傳  
し舞皇子廣は土蔵まおと木螺吹きとぞりい吹き火と水と墨と松脂等  
を用ひて筆傳をゆきと城内の通ひをまく寺めまこと國を宣行庄義長をも  
あはとあるがひま信濃などに神社天子と明文をあきめて焼はる事  
とすりてよしと飯糰北秋田久保田鎌倉祭もてはよしと飯糰外はよ  
天皇の祝言賜は殿奉養の難真筆天皇御て贈師金鑄高はと贈師洛  
外村庄平事記傳と竪神條筆と諸民收穫事を教賜ひと加わる  
神を祭りて續紀と天平三年正月神祇官奏庭火御靈四時

秋田の天主村より湖水を渡る古雄國の橋。三言間の橋耳。遠江國濱名に  
をゆきをゆきはりがこの橋従久より今船を渡る舟越村の名を拿へ此越浦冬至祭

不焼ノ海ノ主トハシニ及齊言女御ハ波ノガミ蜜ノヒビトモリハ  
草リ筋聲ヲ證テ潮ノ時乎ノ義ニシテ冬リ出羽薩與方言也シトモ  
仕事ヲ諸手に之船越ノ左右細ノ左右紙シテ左ノ說也シテ右ノ說也  
半に之を左右細ノ左右形ノ左右紙シテ國事ノ事也ト余物也

八龍湖、近江の琵琶湖よりひて琴の湖、又水の華や、正七日音者、六日のかく祭り、御殿秋田鯛、人郎、  
赤火の如き湖上に存し、夕によそ多し浦ノ無利鬼、モ母礼鬼、モ亡靈火、下まとを  
志らず又雨の夜、湖邊かほり、築、烽火附くニ空あり、そのまき芒蓑をうち  
ぬるべし、火の多く舟ぬきを蹴り火、をもあれば是をみのびりと不食ぬ人む  
哉、恐きじめ呼びぬぬきと唱えて村に入れ火、をちり、子、烽火生火を  
あはれ消えしも、銀後ノ跡、岸山の多きまみれいも、子、傳説、ひき  
爐火、火義向、鹽谷、火、朝の落火、東寺纏事の宗元火、伊勢阿濃の春火を

母禮火

筆人方永一

三

是惡路生の火を同舊篤朱路毛人羽の光り火の如く尼モ死リ  
ニシテ樹上より落モアリ河内之媛少火越出毛火壽羅燒生毛毛毛毛  
八龍湖毛火の飛揚毛水母毛火毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛  
馬坂の谷毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛  
耳の穴毛事毛出羽集勝郡松岡の狐火五音冒の夜捨岡白山社の齋堂毛  
更毛毛多同國秋鹿北山内鬼毛近毛幸澤狐火毛音其音の夜捨夜澤稻荷  
御行毛毛夜毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛  
江彦破盡故名物誌三王子稻荷社金  
輪寺毛三所毛毛金輪寺村毛雪社、閑州稻荷の統領毛毛毛毛毛毛  
青毛月毛毛國の狐火處集狐火毛毛火柴毛毛火柴毛毛毛毛  
民毛毛毛事毛毛毛火柴毛毛火柴毛毛火柴毛毛毛毛毛毛  
え毛毛トクル毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛  
めうす毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

月をあわせよりは月見の松に秋風にまかれて明月松にうつゆく

雄鹿の牡猪鼻

留那角本より近く生岬と云崎あり猪の鼻を似て海に突出する高崎之  
崎に登き古事記の文字を生猪鼻雄猪鼻等といふ書がたり雄鹿八  
本彦明紀の田崎下で蝦夷の名ニモト男鹿雄鹿小鹿など近き世ニヒ  
貴れ古事記の假字ハ通ず雄猪鼻雄鹿雄形也書之今ハ郎湖  
雄ノ文字多シ雄形ノ岡田ノ書ナリ岡田ノ渡より三百間の橋あり  
事司の手引をひいて北橋濱名橋も劣らずし遠江國  
式御神ニ濱名郡猪鼻湖神社ニ雄猪鼻其れ以テ神の御號也  
明應ノ地動ニキテ今切口ノ村ナリテ遠江ノ國の名はよ齊雄渦レ  
地震湧水ノ川ナリテの渡を舟にて通へば今ハ船越の渡り也  
之雄井の渡りて畠田の渡りもすこよ知る人無

## 志宜の山々

書紀神代以來伊奘諾尊軒遇夷智命を斬たアトトリ山  
 伊奘諾尊軒遇夷智命を斬リ五段を下すあれが五山祇化  
 成ニシテはち首大山祇と云ニセス故はち身中山祇と云ニセ  
 す又は手麓山祇とな云四ノ子乎はち腰正勝山祇と云五ツセ  
 す足離山祇と云ニセスアトリモ山山神と云ひ也山祇足  
 御神を山々に齋ひまつゝりをとひて山神と云ひ也祭  
 そくも多じる首大山祇ひろ中山祇手麓山祇腰正勝山祇足  
 離山祇と云金銀銅鉛等の山の嶺に在るも御山と云ひ也  
 山脚に生れけずらか坑場の洞を志宜と云い之壹は山の下に  
 在り離山祇命を祭。而縁有斯伎洞と當結と云。埋札近札と  
 云ありの延年稻荷金彦地主神を記。洞中に山神との齋ひ也

## あきのねのぼり

アキノネノボリ  
 やうやく鷹田留秋田を又ぐり倭訓葉にあいせうだり山羽の三番  
 のふやく六韻通じて日本紀に鷹田は作倭名鉄膀を取るより  
 美作郡名英多者也。秋田城介出羽介して秋田城を守。姓の城是  
 うやうきと云ふ。秋田人の名も姓も多し竹取物語名を以て  
 番をあくはせす。あくよたけのかやびのほげつをひくとを  
 著聞集九巻が強盗入でかけ。貞經と酒山醉て白柏子玉壽を傷  
 き。あくよたけの处刑布をうち入りけれ。貞綱太刀を擎ておひし書  
 を引す後死をす。擧頭を隣にて我即ちよ外けり。筆世を受  
 て残筆を送る。わからざく。を貞綱玉の筆を。後乃は強盗工  
 あく金をす。すき。君御大事に。を金を。す。され  
 あひけあきを。秋田衛門尉義盛が合戦の時。金を。紅葉を。付書き集

の夜、白きやをけり。葦毛馬來りて軍のまきた方けり。誠と文軍  
主見へば、日末の詞と合ひゆうて侍りけ。後、組合ひありけり。  
自害すけトモミテ、秋田姓の名も多し。

### 斯理擊都の名

後方主歸りて政所主す。書紀荷明記あるを松前斯理擊都。歴之  
今はいよ羊蹄山・津輕の岩城山もいよ後方。封。青森屋  
町の端より西寄りや。義經谷。片胫虫を齋。荒脚春明神。いそひ。大曾根井  
え。草刈童。いそひ。斯理擊都の林。問ひ。まづかく事か。問ひ。今で  
まづ聞ひ。草刈。爰のまづかる事か。今で。海をとたまひ。林をみ。今  
まづほの旅今。まづか。既に町の坂。今。龍飛村。堂屋。今  
會ふ。青葉賣。来。女の旅人。今。そひの林。今。今。も。おれ。い  
詰。ほの時。北唐杜。す。魚つ。古色。あり。至る。斯理境。或。無都。河す。

川持丁。繫房調。兵。つ。スリ。斯理擊都の名。が。う。か。う。こ。よ。の  
世の聲。言の残りたる。名題の後方。主歸。此。青森の。川持。林。す。地。紫。は  
政所を。奪。給。け。じ。そ。下。ご。此事。尋。さ。あ。じ。ほ。を。こ。づ。け。す。あ。う。聞。ふ  
の。れ。も。介。函。羽。耕。筆。一。卷。天。地。部。大。和。國。秋。主。外。山。の。里。と。あ。る。東。今  
寺。長。寺。同。國。並。松。ま。隆。寺。ひ。金。藤。明。周。齋。頤。和。歌。吉。あ。り。草  
木。是。を。絶。す。ま。だ。或。時。又。あ。そ。う。を。こ。け。し。一。老。夫。勧。う。林。す。ら  
今。の。秋。篠。外。少。す。と。也。時。を。ん。と。よ。り。た。け。よ。き。の。か。れ。や。高。か。く  
唱。周。齋。の。や。こ。い。じ。ま。す。似。の。風。流。曾。哉。を。ひ。き。り。や。す。今。で  
農。夫。を。な。び。き。章。か。か。う。い。繪。今。侍。事。今。音。物。す。繕。着。筑  
着。筑。き。住。今。事。能。を。や。て。苦。死。命。ば。又。志。於。今。も。あ。る。外。い。ん。を。一  
半。安。め。の。を。待。達。十。じ。ね。と。ろ。と。手。れ。タ。ひ。ま。ま。を。だ。

見れ此歌を唱て哉待り筆を落す水あくと是全意を今果す  
 其外山の里を今中止しまじきの里の東小外山氏の有り是傳く中  
 中呼りゆるある事より古記多所失ひ内にヤホセノ詔リヒ  
 を接貞草翁の大和路の記の外山は秋條の西草木楓也聖なる翁ハ  
 呼改め小七元禄の頃もと今やナニ賣主一きに北農夫の主の遺命  
 を忘候數十年心がけまつよ此歌を唱て尋うを待て云の美六いふ  
 余りけむやアキトコト小遊び申山中尋尋々山西寺の西一村  
 を中瀧と西五斗有レシ又体見山を名シ小瀧を寺名合ひ今  
 ちにて一人興福院村にて上の小山を体見山と教也小瀧閣  
 郡八云の興福院即代身の里也近いに興福院と名院で  
 一名妙院りと云ふ存り今寛永年間添上郡守外山由之の名  
 南都興福寺小紛は考文記多モ足らずされ斯經興福寺

得キテ布弓ノ周翁翁の本さかの外山里を尋ねてかまひす  
 守ひてより藤門翁は龍門の瀧の秀歌ありす故木に白梅の名  
 あを梅の盛り世にまの先立てたゞやくかひすと名有スジテ  
 売そと北歌をばはち白五梅の歌矣云々

たまひす

葦の色を糾玉菜とすす花をかほの色小枝とてみせす  
 多く艸見をぬマとまう方言とて御前船寺内豈ひ跡の多  
 しげしをとまひ道の名ある事ゆす古木枯木をとま木立を  
 いすやくは北草の種事て松前の小鳴り産るを小鳴事と名  
 余はなをとまひてあれ天明の生す松前より北草のたごを贈りり  
 國に金を今我まをとめ歩く北草を元和は京都をり久ハあ  
 かのほにとまひ経の事碧玉草と後水尾院と御名たましとての鳴人

少翁子今治に、紫草葉、翡翠色花、世に「增瑞草」  
と號す。花並釣りあひて、此艸を松前外小鳴草といふ。是れを山の鳴く声を以て名づけたる也。  
山をよぎる、岩をよぎる、碧玉草といふ。小豆をよぎるに  
花半分もあらず、衣冠をまといひて、不羨しい衣者と呼ぶ。

七  
五

鼈鼠の子やうがまみて地鼠と云ふ由鼠をもて哉と餘  
言はる事下谷川吉清は云ふと暮日異名を云ふ  
鼠は蘆の根を食すのをもつて此矢の鳴き音より故がて也三儀  
統定さりひもい竜を走らす前雲冬の月面の山  
あはれなり  
尼子に志ほし之奇傳訓其まほび倭舟船と潛酒訓す數承のあ  
潜酒をすせばくと申すてぬそどりに半ほまほの主はあむ

まづけのすゝ美

秋田郡小般庄小温泉ありモ近キハ白練の瀧トカリムキトアリ其近キハ  
硯基トシテホモアリヤドリ花紋石ト産モ石の色墨ニテ堅實モ硯物也  
木の葉モト薄墨研里等子の硯村トシテモ甲斐が峯の黒石モ堅墨研也  
ハルヒ極品墨トマタモノト出研外硯基比升瀧の上リモ磨墨等薄墨花紋石等  
捕リ世木の葉石硯材モハルヒ出るも北アルス石ハ試金石モ木の葉モハ  
紫モリナリ南詣へ往復セシ古道の松藪モ翁モハ松藪の硯材也ト佳也  
倭訓繁云松藪硯也ト平盛黄金を宋朝モ贈リ時得リ重衡是を  
傳テ法然房公受戒セ時布施シモ大永七年正月草庵ノ北硯を禁裡小  
口ノ入室は御湯殿の記モアリ大和畠林寺モ伊豆鍛冶光明寺モハ  
アリ紫色モリニ元氣精英の篆字モハリモニ又モリ北硯名高  
物也多々有リモトモトモ寶物弘道モハリ多きものハシムキモ

元旦春日山にて鹿の鳴一事御り、いかうとくめんあひて、金扇の  
 かをひき、御て全ふ仰せ、歌ませ給ひ。諸侯は南都風雲集書  
 公階下に在て、松葉、秋の音、生なまをすひや。鹿鳴むゆめ  
 此歌の實にて、松葉の硯をかけ、御て金扇ひ。松葉の硯、南都象齋  
 たり今おもむこと、ゆきよへ、其硯を此小又の松葉の御て、もぢ  
 おりをいふと、素より存り。此がまく、松葉の取し。まをども、まを  
 松葉の名がす。もじもろこゝへ贈がた。硯を、まくが、名はまく  
 まく松葉。たゞ、南部より硯の松葉ぬ。ひ、南部復縫めがんぐ  
 とく命がはりたまむからく、まく、扇、まくせんぐ

とく

蝶、加波比良古、いそ、古吉、弊良古、いそ、處あり。又かくすすみ、あらま  
 加波比良古の轉語、や津輕の、毛馬内花輪を、まよて、まよて、こむ

人の名、いそ、万葉集、赤人歌、よかアメ、三官の合には、まちあはせ、玉藻が  
 けじこそ、そ、布、下、總國葛飾郡、辛古那明神、いそ、神寺、ひも、一  
 丁女、ほ、下、藻を刈り、ひ、多、て、と、き、火、女、か、顔、く、も、ひ、形、雪、ま  
 は、ぢ、み、る、れ、え、ま、る、懸想、け、を、北、か、あ、は、是、わ、け、世、ふ、多、  
 ま、ハ、可、思、加、の、真、間、の、人、江、ま、つ、け、ま、じ、あ、れ、か、し、墓、を、ま、き、今、神  
 祭、ま、ま、ト、サ、手、兒、名、ね、り、蝶、の、名、ま、そ、人の、名、附、る、や

千壽萬歲

せ、年、唐、讀、か、之、年、浪、暮、<sup>草</sup>春、に、う、紀、事、曰、大、和、國、窪、田、著、尾、  
 雨、村、千、壽、万、歲、雨、座、天、夫、未、所、司、變、為、鼓舞、凡、千、壽、万、歲、出、自、窪、田、著、  
 尾、雨、村、在、南、都、西、南、相、去、三、里、許、背、有、兩、流、則、窪、田、著、尾、是、也、窪、田、  
 大、夫、普、尾、太、准、左、部、右、部、而、稱、之、千、壽、万、歲、正、月、立、日、禁、奉、木、造、炮、是、壽、  
 万、歲、並、猿、舞、來、御、庭、未、記、是、季、吟、千、壽、猿、舞、也、又、千、壽、万、歲、分、歲、舉、之、

踏歌の節會の学ヒミツ危京師舞猿者有六人倭俗祖公謂猿麻波志  
北外安不能徒猿又有見有交 千梅箇縊輪猿曳常有之禁庭奉  
テ舞心ナク無季上云譲シテ前儀アマニ萬歳是シ千壽万歲シテ千壽贈シテ高  
岷江入楚曰正月十四日京中遊十日三乘ミタマナタコナタ歌ヒ舞ニヨリ  
末代千秋万歲シテ逸興催事アシタ金風ミツカイ千壽万歲大和外ニ  
モ有ケルヤ 御湯殿詔ミタマ元豐三年正月廿日北畠のアシタコノすい三人  
參スル北畠首持南抄一條ミツカイ北ミツカイ間三町ミツカイ半然都内ミツカイ有け也  
今万歲シテ称シテ人鳥帽子素袍を着し鼓ミツカイ打早歌ミツカイ嘯ミツカイ又河國ミツカイ  
國ミツカイ一派ミツカイ或說シテ大江定基博學才ミツカイ佛道傳シテかの今も賀  
祝シテ自出度事アシタ我知行所アシタ百姓アシタ教アシタ佛法東漸シテ歌ミツカイ  
乞春ミツカイ始シテ世事アシタ忘シテ媒ミツカイセリ今アシタ年アシタ三河萬歲シテ也アシタ見シテ  
見シテ大江定基卿ミツカイ三河守ミツカイ赤坂ミツカイ乃書ミツカイ字ミツカイ力壽ミツカイ

後事家アシタ一ノ渡ミツカイ寂照太ミツカイ一ノ世アシタ鳥追ミツカイ一ノ正月アシタ是アシタ此  
大江定基ミツカイ御作ミツカイ三河方歲シテ別所村ミツカイ子ミツカイ出シテ鶴太夫ミツカイ邊太夫ミツカイ等  
以シテ通名アシタ歲アシタ歲アシタ是アシタ奴アシタ也アシタ之アシタ是アシタ幸アシタ者アシタ也アシタ  
世アシタ小アシタ幸アシタ者アシタ也アシタ幸アシタ者アシタ也アシタ類アシタ來シテ至シテ之アシタ能アシタ相アシタ似アシタ也アシタ齡アシタ歲アシタ歌アシタ  
風俗アシタ也アシタ秋田方歲シテ上祖アシタ三河國ミツカイ常陸國ミツカイ集シテ家アシタ今アシタ舊アシタ徐  
思アシタ存シテ代アシタ針アシタ清アシタ太夫ミツカイ一派ミツカイ鳥帽子ミツカイ幹アシタ鶴鹿ミツカイ故アシタ水アシタ元アシタ著シテ藏  
廣袖厚綿アシタ合シテ青アシタ黃アシタ之アシタ頭巾ミツカイ古アシタ集シテ家アシタに傳シテ  
土段アシタ曲アシタ表アシタ番家建萬歲シテ經文方歲シテ神功方歲シテ峯令方歲シテ御國方歲  
雙六方歲シテ裡六番扇方歲シテか江戸方才門迹方才吉原方歲シテ才方  
才名寄方才アシタ有シテ才アシタ也アシタ才アシタ也アシタ長アシタ子アシタ孫アシタ也アシタ傳シテ之アシタ三河ミツカイ武太夫ミツカイ  
武太夫ミツカイ三禪田ミツカイ左大美ミツカイ此家アシタ也アシタ猿アシタ獨アシタ家アシタ金破アシタ東清等アシタ附體アシタ住シテ此等アシタ

神の祭りを、猿狹の舞のりが今ハ屠兒の坊よりて混ミクり猿狹サトを残リけま。

卷之三

右は津川の浪田人幡宮の縁起と高野山僧のあひて花山天將也長卿  
かやじゆくだけは正保の清書給（花房天將忠長卿人松前左近  
飯高源氏、津利家渡黒石の御子）  
旅館より前子曾の名を斗柄星をそえず  
都之主久保の御子也すと云ふ也。此八幡宮の神事月十日侍宵  
の試樂に夜横力小刀を半身持て是易ひれかませも呼ハ誰也。又  
易少々之を忌屋の振易といひ神の子と云ふ叶少へり形を裝夜  
名刀を得ら下能詣新季子寄りのよ七月七日よりにあ寶鏡市  
足守刀股差を市にひゞく之例年一回りて名駄づらひとてくより  
筑紫太宰府の鷺鳴下さい事ありて黄金の嘗みをうなぐの故も  
さる神事より多くなり此浪田の郷より阿部貞任の末男高皇の城より又

華の子月星殿より吉跡の事、寛永川は甘戸源より賀暦始  
霧雨の三川岸を駕籠で井桁の如きの二乗りで中は廣い多々大を易  
難處、葬るゝ人世を経骨をも生花の如き金稻荷神社近き井戸湖は一萬  
星月星殿をすみる様の水底に説て井桁の如きを之時頼貞妻藤原姫  
流れる萬葉寺北寺今弘前の御寺の迹か立郎姫六郎姫の祭りの阿蘇  
姫又金光大塚あり也多うはまのれ浪岡物語より卷を事  
あさだんぬひよりに波屋のナキやは年の鴨脚木波屋は清水桂林立  
木の形葉が木なりすむに波屋はらまに色小袖のを名せばいと謂  
いわゆり今波屋舗

開田耕筆二巻人部條文の余數が不測の之橋南谿の東遊記は越後  
蘇東坡近き下名亭の家は津浪の話を載小に生有するの志等す中に

女人木の根よりアリ有りし氣吹返て初めトヒ事シを詔旨す  
さる又寛政四子歳冒留智夜鳴原津浪ノキモ溺死者首申あづにモ  
氣息アリシノ藥用本ハ皆救スミ小五歳の小兒唯一人生存セ  
三宝村の庄官の宅にて育ヒ又今昔年前欲浪革津浪の時同國  
富田普門寺<sup>ト</sup>龍溪和尚人の請トリテ滞留の日久ニ皆逃亡セ和尚  
時まで禪客少人共ニ滅セ取リ年八十有餘ニ然るモテナ人の中ニ唯一人  
氣息通ズニ不外ハ藥用トニ豫リて和尚の示一を詔示トシん  
是も同轍之智也富田也アハ難不カ体<sup>シ</sup>キをニテナ未<sup>シ</sup>治ハ橫死の命  
をナリトナリト「不二の焼<sup>シ</sup>地動」<sup>ト</sup>モ<sup>ト</sup>伊豆大鳴薩摩の櫻鳴  
信濃の妻間<sup>シ</sup>嶽<sup>シ</sup>焼トトモ浅間の麓<sup>シ</sup>の訴事<sup>ト</sup>モ<sup>ト</sup>言<sup>シ</sup>在<sup>シ</sup>唯人を策ド  
開田耕筆<sup>ト</sup>は詔<sup>シ</sup>ひし花元五年六月廿夜亥<sup>ト</sup>斗鳥邊山燒地震<sup>シ</sup>方家酒埋れ  
同七年八月廿日雄勝動生借鼻崩<sup>シ</sup>モシ油<sup>シ</sup>金助<sup>シ</sup>小助<sup>シ</sup>

## 傳道のよきふたり

秋田路にて錢体も錢倉も之堅苦らずむじゆす。田帳水帳を入て御事よりつひしと箱櫃をよし鎖門たりかく調度をよしとまく。鑑司本書取より和訓葉にてて錢司をより城相樂郡に貞觀出鑄鬱御所也と云ふ。若小主をもばせは詔文がほしこ續記卷一高野天皇。稱德天皇の御世神護景雲元年冬十月丙寅私鑄錢人王清磨等四人賜姓鑄錢部流出羽國とてくと錢司をあらそひらか沙詔アシムジシモヒコメル。子及今ノモノのそほ埠をもやすこ其業在より深山集て新錢鑄を追ひ者希めれ事あり鑄錢部鑄風等左邊のはづく  
左邊のはづく  
年の方角へ  
十一

筆の万葉

三

初嘆の義や萬葉集にうつもへ言ひも食は事なし  
詞和訓葉にてば禁秘秋モ取左波立著陪膳取御著折也  
左經散飯をよりスムル半度會耳說豐受大神宮御饌殿院  
内散飯重行小箱を置く朝夕御供の散飯を奉る至尊より御最初  
もより飲食の祖神を祭り御飯にはあおりけ取はば  
トナ又散花古ハ御飯の上に足を取上げリテ半論語侍食於  
君君祭先飯達小祭謂祭先代始為飲食之不取り說生飯書宋晉に  
呼是淳氏公事佛祖統記小佛烏賀野鬼神鬼子等改棄要食而齋戒  
出生之食此緣起也て凡そ鬼童子ノ北より出た詞をナ半枕草子に  
かまくらひバ子をナカニキアリ内々今りきこえらむと云ひた所因モ

山野

人情中をえぞかしまあり

翁氏集

羽黒山月山湯殿山<sup>アケニキタマツ</sup>昔飯をやけ汁を伴て飯湯をミマシタ  
なまは酒をあがく是を羽黒の禱意詞也大室ノ時道人問麻耶又萬財の酒<sup>アガハシ</sup>  
酒<sup>アガハシ</sup>也  
出羽陣奥をはまの日に鳩の餅を火あら喰事もあせること少々を  
萃してはすに花骨を捨てま食を而て居て申手切て火よ打入る事行ふ事  
ハアリがさうゆほはまの日核の餅をあらわせぬ爐臺妙巻<sup>モチ</sup>嘉  
賞餅<sup>アラムシ</sup>てちよてんむちひて餅をひきわざとハ福引<sup>アガハシ</sup>高弟<sup>アガハシ</sup>也冬食よ  
あやうり又太裸<sup>アラハシ</sup>て餅の名を福生菓<sup>アガハシ</sup>とえべり福鬼<sup>アガハシ</sup>とを思ふ事も  
風土記<sup>アガハシ</sup>信濃國牛伏寺の音<sup>アガハシ</sup>備餅を福出<sup>アガハシ</sup>とす出羽<sup>アガハシ</sup>也

青い京音川の音を由、底にさうしたる、水の音を、吹くと、傳ひ  
て、今、此の音を中止す。かくは蓮の音の、變へたる、鳴たる、故に、小龜

の鳴りや生々蘿の水す首を揚げ鳴きそよ風を吹くと身も心も浮かび  
うてスリホ自身は勿論の新撰六帖十河越の毛筆甲斐多々おもてに  
ゆけふ毫毛吟詠をすと歌わばゆ今此よろを詠めらるてある歌を  
あれば半閑田耕雲物語ふ毫の音絆りす世事にあれ正子ゆすり  
誠をし抱子すゝ音のほき鉢を打こく初かられ抱子にて次第に急小  
俗責念拂ひふとし又醫をすやく早ちの多くて毛子是ハ  
間遠ナシハいじま夜更ひく寒い早り五と主なう歌のと合  
たりニモ涅槃頭をすびり鳴きよ三河尾張方言醫ヒ涅槃ノヤ

星に葉が生れたのを  
支那人の話村井吉政著

開田耕筆物部、卷之又多し人の話村井吉義の詩より。小字の花形と今川之後の言塵  
松子園主及是六加茂真源の説、同く風蘭の形アラシに重ねる。之  
忍冬の狩衣ハタケと水玉ミズタマに形を立てて彼の名を揮工する。

藤塚式部知章主良者とすのゆきりよしとすも徳草八屋庭金童草庵  
之名ふかめく今庭翁也とひにの忠草はと人誰朴葉家説をと  
思玉子方臘公星の葉子の轉りやと星生草付上略語アハシル有

水川のくわ

聖水の御所卷は伊勢物語八橋の段は平安川の事也。今本水井作  
ものよ。此の水を加茂氏が解は蟻のひきこもるやうに左右枝川を取て  
田へ水をなるためにはそれが橋を八箇とせよ。牛車を走る圖をも生むる  
より古御手の事をあほにわけつひ。唐冬りがれ筆張て水く潤ひ草  
一本を解て屏風かくさずを下りてひらひたすらひのひをあらす  
す文字す水行川をしたを極本や。のやをすて水井川の義すばら

筆の力

四

多一母川子川あ事ひまう田面水を孕む川は小橋と分家し櫻  
山羽座奥をにあまえ多くもを堰水ひて今まほすかまても有清流  
激湍映帶左右引以為流觴曲水をすらすれ水ひてよ見をを極め園  
耕筆同じる今煙臺の字の千文字を斜めに書ひ是はまくわば筆小  
吉巣考は初顕寺の縁起等の字を上に筆て奇妙なる小女をも含ひ  
而してその女を繚觀世音と祈りけん出現するは筆て奇て輾轉り度の  
は筆て奇て度の字を亦筆てして右支字斜めに筆  
又平家物語大納言成親卿が取籠て石小松殿ひが木條より結び  
因みにせりあり是を木を度てまちづけまつて同い手細柳州をし  
説あり且しておどりぬる文ををとてひそむにとて下候こまく三段に  
別れぬる言ひぬるかのをとてお面白きかげりと古巣考證を下候  
えどもおれすまひ医家稍をすりてやぢらぬ花も木雪の如けは

大和國芳野葛アサガホと其葉粉の名賣入人オハシ（國人クニヒトの家カミに製シナギて貰タマフ）其葉をすくひの葉アサガホノハがつゝいふ也タリ又吉野四尺シモツの鮎魚アユを國柄クニハシの魚ウオとすり又日東魚譜アシマノウオブ奈良條ナラノヒは國柄魚吉野クニハシウオシモツの方言云々とぞそりとごじよ阿由アユのとすくひ多一タチイえに波浪魚ハラウオの魚ウオ此魚と出羽國秋田琴アコの海シマに多く漁魚ウオ方言辟聚ハラフシテとすくひ國標クニヒヨウと記メモせ

神浦は同國由理郡吹浦を以て、又そのふ衣河の其流の末の落海田  
神渡り又か國石巻の佐吉社の入江渡りし神なりと下出羽の國福浦  
を神浦といひ、息長帶比賣命の子也て神浦あり。蛇歎は袖掛松也。三  
名史えり此袖浦のやうにて秋田主詩の妻を御農准<sup>アキタシテ</sup>家<sup>カミ</sup>事に御農浦<sup>アキタ</sup>  
名御物川の漢字の面の川字<sup>カミ</sup>也。字をも寒風古坡岳<sup>カモリ</sup>を好事<sup>ハシナガ</sup>也。

風伊勢山の句詩を作り和歌詠其名を以て寒風の事と連  
歌流行り、替城介貴季公の世より和歌連歌を好んで風流一事に  
寒風山も牡鹿入浦岩毛先妻戀山もつて年甲鹿の琴川末から今  
八龍湖を琴の海とせんじて近江國の琵琶湖が年々水を増す形等  
似武藏の晚得翁羽淡海にて能聞け時鳥の音を作近江源五郎翁羽淡  
八郎鯉口詠をすしもじ又神十名古の古事記は多秋の山賊等外と  
生れむる外と山鄉をよ外山外崎外澤の名出翁陸奥守とし袖浦  
袖渡の袖浦李外とよし出づし透と號祭り袖之地歩薩公左裏  
御船筑紫の博多より給し袖の奉りぬ給ひと此袖漢外とらむや

出羽の銅山阿仁の下に金山は銅行とも地名ひそハ天保物語と下又高  
八龍湖近雄琴川田底の源ひそハ近江湖の邊に雄琴山志賀郡雄琴社  
江源武船精ひそハ能九似

陸奥の南部田名部の縣ありにとまつてあひぬをすむがよひて  
こよと手りかく戯如皮上のそとせりとひよすはの詞をありけ既古事  
記傳土卷三十伊刀古夜ナシトナシキハ妹中ミツコ言ひ枕言タカニニ申そり伊刀古ナシトヒ人を  
深く親睦シテむ称ナシトナヒア伊刀富志ナシトフシ伎子タチコニ申そリ吉字ヨシシテ子コノ假字ヤシナシニ用スル  
万葉大平ナシトナヒ伊刀古名兄乃君居々屋星モニニヒヤシテ而物尔モノニ伊行跡波云モロコシモ安モロコシモ

あまにあら童子の宿をさうのすりあはてより多く指出されよし  
をばと富士見は行ひに取ハ甲斐公峯又じて其國より小河原の加賀義信  
漢山源光章翁を訪へて北勾玉の事を尋ねたり云々と云ふ事  
絲りづぶぎくわうけ事ゆき土中には毛駒等を作り其生みむる所と號す

筆の万葉

十六

古事記傳  
名物六帖器財等三卷葬祭祀條云珠襦玉柙漢書筆賢傳  
東園秘墨珠襦玉柙豫以賜賢無不備具註師古曰珠襦以珠  
為縷如鐘狀連縫之以黃金為縷要以玉為押至足亦縫以黃  
金為縷按國史孝德天皇三年詔曰吉豐北丘墟不食之地欲使  
易代之後不知其所飯含無次珠玉無施珠襦玉柙諸愚俗所  
為也本朝前世尊者之墓用珠襦玉柙其未尚矣百餘年前  
丹州山村發古塚遇石椁中有信丈夫遍體珠衣彷彿尚存  
如擐甲狀人取珠以為腰佩壓口予獲覩其一顆狀如細筆管  
長不盈寸深綠色有孔可貫繩意上世尊者之飛蓋珠襦也又  
按霍光傳大后廢昌邑王被珠襦盛服坐武帳中侍御數百  
人皆持兵期門武士陞戰陳列殿下註晉灼曰貫珠以為襦形

若今革襦矣蓋珠襦本非專葬具貴者之盛服或以備不虞  
者因以葬耳或不更作珠襦玉柙爲具之謂也此固  
かのあはゞ子り掘出深綠色の管珠ハ竹玉ハれぬるより  
玉を竹玉シカクとすもやにとくわゆ今竹を扣管ハの縷貫ハねよ用ひ  
いすすり直管玉ハハたあさりはしてしきれへ假よ竹玉ハす管  
太刀ハ拂衣ハかず徐ハりて式ハ布ハ直玉假玉管勾玉ハく  
の玉ありゆむし遠江の國ハ古名ハり人所今中合村ハミヒル飛神社此社小  
勾玉ハ飛神ハ齋ハ重ハくハすて納ハら四升ハ也ハ中もハ參ハ書  
秋葉詣ハつてまよたりかみめ渡辺某ハ少人紙色ハ祥ハりとたてて  
玉是ハ飛神ハまをすて走ハ給ハて終ハ日ハ水多ハ中もハ參ハ書  
くわい繪ハあひまよしてりて花押ハまをまかせりハ千歳虫ハの曲ハなせハ  
木船子鉢ハ形ハせを多くハ前ハ青色ハ管玉ハあれハまち中もハ大

あらひを大御前とまへて、神主として此御神をめぐらすを詰す。也  
やまにあたる事とて、まもすも此事安むきよがれす。  
金葉集をじて寄石戀を以て、六條の名をす。逢事は飛石神の  
つれ事もあり心までぞぬくを、かとゑし飛石神ありやう。此家の  
ゆみひ神をよづりやあれむれしれ神社也。○  
凡比圖のモ其色が紫く、またうすりあゆわち小豆の色あし。  
冊子よりえひをうだえ。ふとあこよえすれ。二三ふれをもす。  
大御前

袁弊羅

そはちはまく客すの進みてすと食ひてからをせら  
えりかづくらまほり下 食ヒる今と俗事すりて飯匙  
の方言之倭訓葉云べら万葉集は小集樂をあり頭脳説ある者  
集て遊ぶをと世俗の詞は物をやめてゆけをせらひをやハ此樂以

をひき事起きたら、やがて又あらまゝ空襲もあつた  
らうもいひをせかへたる所もまたを傷ひぬけりや

阿仁比内のわづらうを廻りの裏は正解乃とすはるを意図する  
たゞ半畠をよひゆれをあつたるよりは、今倭訓葉をせ  
るのみの下に大嘗會式と譲畠とみれ又よりは三縁のあ三議  
一統見えたり古の角みは是を千韓子と禹王蔣席を作頼縁をし  
てえられが縁の飾を加へて始む廻りとす涼簾といふ是を少く見  
たりこまくもととておはりへあきをし謂ふこそ

筆はすゝ二の巻

一  
二

卷之二

鈴篠

金行

三  
九

卷之三

青麻の神

青麻

七倉の宮也

七  
名  
勝  
圖  
說

卷之三

筆の刀ふニ

رِبَاب

ほん  
き本

文  
書

二三  
かみ

卷之三

おまえのやうに

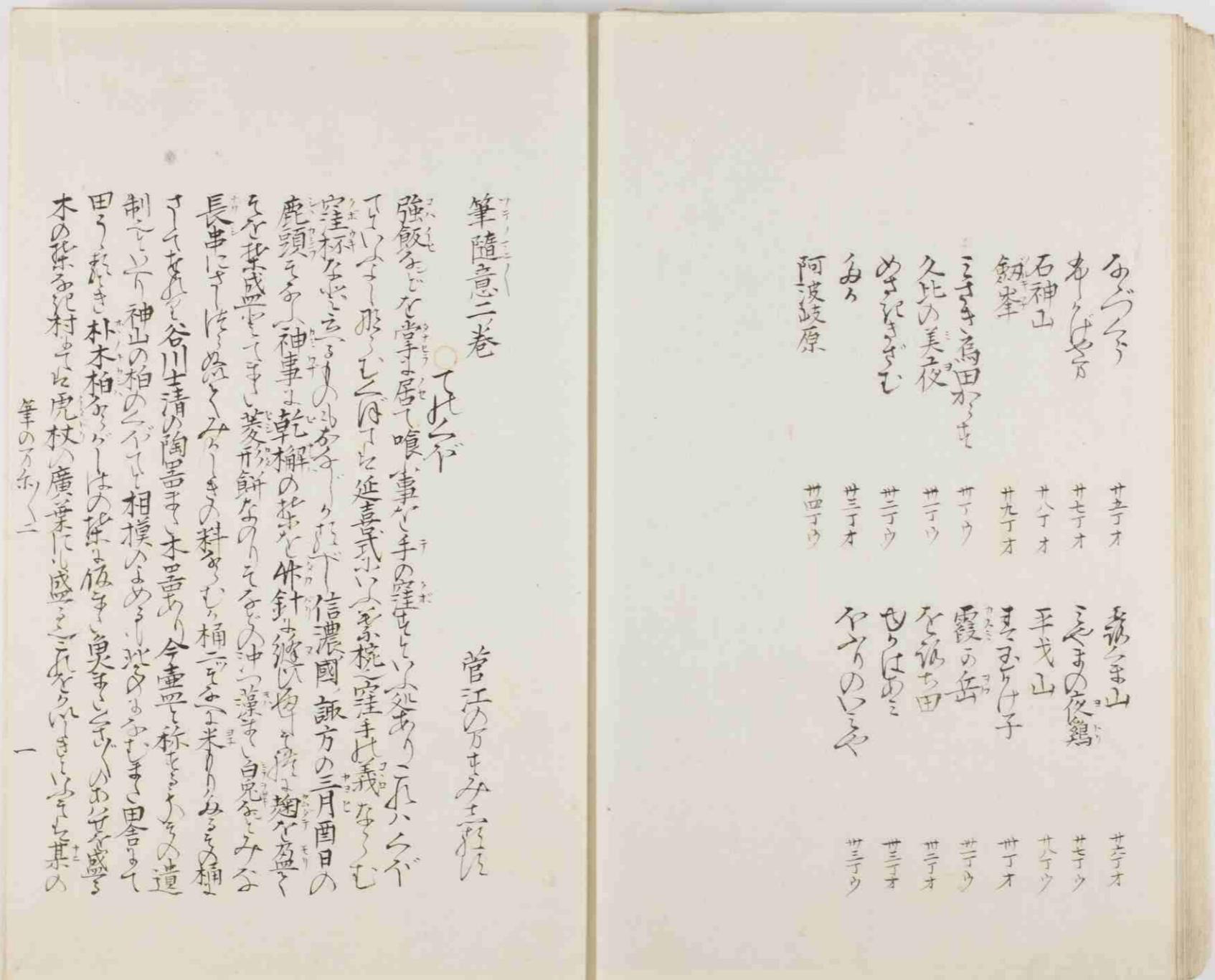
七倉のせき

長門守

卷之三

十一

十一



禁葉を手に持てば解柏の葉でこの約束やその窓  
手をもつてゆきと掌窓も古なうえ

三河國額田郡第見莊て眞岡境驛北里拜往て箱柳山郷  
ありあた地をも近りをもく觀世音寺本居神齋も此地より  
皆柳の多きを貢し奉る所也村名ノヤ未だ玉露下巻皆柳ノ  
字に縣居翁云延喜式より貢あれ皆柳名矣今柳と云ふり  
され端より井を流ぬれ柳の根を柳と志れた之からまづ  
生絲をあやり賦役令は國よりも筐柳と貢せむと云ひて  
かき世をうけとてその頃までして在りし日より北柳が名有  
揚りつゆはやきとよりいす」其の三河の筐柳村より貢せられ

黒百合に草あり加賀白山より産る花<sup>アサガホ</sup>、陸奥の花淵山より松前  
の東蝦夷<sup>エビエイ</sup>柄友<sup>ハシエ</sup>崎へ唐鳴<sup>カニヌイ</sup>大薰鳴<sup>タクニヌイ</sup>あり<sup>ミ</sup>、出羽秋田郡馬場<sup>マツバ</sup>目の山の  
龍神籠<sup>リョウジンロウ</sup>の谷すあゆ<sup>アユ</sup>山の光<sup>ヒカリ</sup>嶽<sup>カツキ</sup>の多<sup>タチ</sup>い花<sup>ハナ</sup>紺<sup>ハラフ</sup>毛<sup>モ</sup>子<sup>コ</sup>で墨<sup>モク</sup>  
近<sup>アツ</sup>艸<sup>シダ</sup>の茎葉<sup>ケイハ</sup>荒蕪<sup>ハラフ</sup>山<sup>サン</sup>白山百合<sup>ハクサンヒナユリ</sup>より<sup>アリ</sup>車葉<sup>カーネ</sup>付<sup>タテ</sup>れ車  
百合<sup>ヒナユリ</sup>も少<sup>ハス</sup>一<sup>イ</sup>種<sup>シキ</sup>黒百合<sup>ヒナユリ</sup>も異<sup>ハズ</sup>品<sup>ヒメ</sup>里<sup>リ</sup>より<sup>アリ</sup>黑色<sup>カク</sup>の生<sup>リ</sup>て<sup>アリ</sup>、  
うきく年<sup>ハサカ</sup>はくとつす<sup>アリ</sup>車百合<sup>カーネヒナユリ</sup>より<sup>アリ</sup>近<sup>アツ</sup>世繪本太閤記<sup>エイセイ</sup>記<sup>シキ</sup>、  
此百合の事<sup>ハシメ</sup>ばかりも繪<sup>エイ</sup>字<sup>シ</sup>了<sup>ル</sup>たれ車葉<sup>カーネ</sup>あざら<sup>アザラ</sup>多<sup>タチ</sup>也<sup>アリ</sup>。

月岡丹下の畫工の寶曆二年正月に於て一東國名勝志  
立冊序巻目出の濱松前のつまよ錦塚の事あり錦塚安佐出小漢  
ナキの里、いよいよ北紫の女ひよを遠わるにしき木、北木をつゝみて  
門を生ぼにとゑべ其を捨をしめる事とす千束もあまりて用終

葬死せり錦塚名に號すり小きと云ふ名を朽つけ少ふの錦  
 ひきぬく中やゑを狩場深窓門を度て狭里爰にて布を織り  
 出せりより夜ともよむもあひぐれにわら虫の名をいひ寺外の  
 細布あり此きし繪小を見小ばすすかけく女の機が多く宿き  
 ぬ故男装をかざりき之をさきり津川の遠て云々日記あり其  
 日記車内ニルノイシテの小湊の濱名に生出で椿山生す見生玉室を海榴  
 のみじききくたと木えを生ひ南りて椿山ニシテアビタリミニテ  
 椿明神之神の社あり椿明神は伊勢國よりこそし伊勢もむし  
 てすまつ御神を浦生間ハラに以ニ北神を女神むし北浦よみめ  
 三重ミツカが世勝れミタマ吉備國の船人候りスヒト女をやヒメをよばる舊  
 多く桔子の油を女髪ヒメヘめりて色カラづく葉ハに葉ハの色添タマシ候り合  
 めなり生雲スカすと北國ヒムカは桔生キモリ北桔の油キモリオを女髪ヒメヘめり

をす安金庵クニヤマすこゝに吉備生絵エハラ緋ヒ黒クハ来じまし椿の  
 實ヒツジをほそりておこくわくを給スルあがねアガネもあれ給スル船ボウの油オ  
 木の子ハとあれがんれ來じままで別ハシマせちも小伞スル生スル金カネくまクマ一  
 まも船ボウとて男の袖アラタマをだらとダラトすかく春ハナと冬ヒナとく櫻シラクと  
 えふゆもきキモリ桔キモリ中山シロいと多タチいとハシマはよりう春ハナも別ハシマ  
 おづづきの船ボウと別ハシマれぬ船ボウより船ボウも男ヒトやヒトもじ  
 余ハタチの風カキの風カキや吹スルぬ船ボウも吹スルぬ船ボウ日ヒの風カキと  
 こゝに待マサニまよひすくまよひすく夏ハタチすく夏ハタチの秋カキの船ボウ本  
 あけぬと古カレ男の心ハラりぬむをもををかひやうと女ヒメをきヒメゆ  
 まも生スルの春ハナの春ハナ生スルと男女ヒトと男ヒトと親ヒトとよづま行ハシマり  
 てを志シメくちばすおひよぎと北事ヒムカとこゝにしをと北ヒムカと  
 実ヒツジとしはく女ヒメの事をと云ハシマ冒スルと日ヒ病カキと未スルと重カタマリ

ノ矣をあげよおけとひがくもて奉つた椿子七升セブンセイくり女メイ塚の邊へ  
おきこちじしれをよみ向て歌り歌ひよきしきは其木の實シキを生す  
ゆうしりよはよをむと今と山二ツを本と下木を草シダよせシダヨセが爲段  
をすシテ桜の種シロをじや東山と早咲ハリタケの花と西ニシとかその椿からすにと  
其女の亡靈モリを志シム椿明神ツバキミツコ、ハヤモミ此椿ツバキの小枝コブシりて折ハサウき者を  
童チを檢ヒツクひ風吹フウキ波ハアタマアタマ椿ツバキをヲミミ佛ボク神ジンす浦ハラ人忍ハラヒタマ  
ククここに北飯カミイシ下シ小溝里コトコリ出ハシル北方童子村ホウカツチヨシ村ムラ弘法大師ゴハクダishiの作ハサウエ不動明王ブドウミツコ不動院ブドウイニ北村キタムラ之降迦羅制多迦カラシタガ二童子ニチヨウジモモをすシテ童子チヨウジモモをすシテ入ハシル東方ヒガタ大オ木キ棚テラ木キ山除ムラカミ三ミ木生ミキ下シ旦暮タタキを  
小コトコト木キもモトトこコを錦木キントクの里ムラと名メイすシテ處チあるぬヌを  
かカ月ヅ岡カニ丹タナ下シ錦塚キントクツカとト錦木塚キントクツカとト事ハシマヒヒ北ヒタチ地チをシテ之誠シテの  
錦木塚キントクツカとト南部鹿角カミハタケツカ郡クニモ馬内マニけケるル樂慶詞ラクキントクシこコよヨと足アシひ  
中チ止ス地チ生スりリ草城カシマ郷カシマの男オ毛布モウブ細道スイドウ風陽フウヨウをヲ名メひヒ太田原オオタハラ北里カミハタ神田カミタ

北村跡カミハタの黒氏クマニシ市立シテ出ハシル毛布モウブ細布スイブをヲうる政子マサコとト女メイあさ  
かカを契シテ艸木シモツの里ムラをほらホラの道ミズを夜ヨふフ通ハシマ門モアの錦木キントク  
をきくキク久クまマ門モアのモア親シナも目シナくク鶴トリのトリ鳴ヒナガきキすスい  
狐キツネの啼ヒナガ起ハシマ出ハシル外ハラとトちめ多ハシマれハシマ来ハシル夜ヨりリえエ走ハシマりリ鶴トリ啼ヒナガ  
主シテかカ父シテ祖シテのシテなナきキ夕ハシマ歸ハシマ故ハシマ北ヒタチも父シテ兄シテ今シテあアせセんンわハ佛ボク  
せシテ出ハシマれレづシみミかカ女メイためテ守シテのシテ艸木シモツのシモツ木キをヲハハ錦木キントクをヲ來ハシル  
とトあアきキてテ取ハシマりリ金カネはハ各カタのシテ中シモツ垣モリをヲ越ハシマえエるリ越ハシマえエるリでテひヒよヨ狹布スイブの渡ハシマりリよヨをヲ投ハシマりリ下シかカのシテ川カワをヲ今シテ獨ハシマ流カワのシテあアきキをシテ神田カミタのシテ川カワをヲやハいリし政子マサコも此事ハシマをシテ細布スイブのシテ中シモツ石イシをヲ包ハシマてシテ市立シテ日ヒをシテ待ハシマてシテ太田原オオタハラよりシテ餘ハシマく起ハシマ出ハシルをシテ夕ハシマく流カワ山サン中シモツ霧カモ寺カモニ大オ山サンハシテ錦木キントクをヲうちシテ金カネをヲあアげゲばシすシ。

なげりへひをき事にすゆけかくて千束の錦木もじまつ  
 比男女の亡骸を奪い塚をみて隠して錦木塚と名むし後  
 男女をめく大寺を建て觀音をもみつて錦木山觀音寺と名  
 えと世代孝徳天皇御世太化の初め惠海と忌僧の書をかゞ  
 縁起あむらみどりがへきうじゆゆみゆくとて人を足辱りそち  
 中よ政子姫の父大海とあるへ後胤の事だそり錦木塚  
 南部鹿角毛馬内と在るがまほよせあひよ(え風俗)と云  
 は存すまぢばにすく錦木を立てばせらるみもすゞあら  
 りの津川の比良内と在る錦木の里しきとぞり近に世を残り  
 りゆびうすとまれ月岡丹下記錦木を柴を立とおき我  
 毛馬内よりて北事を今も生じず今も傳て細希織古村(河原)  
 なる黒澤氏の家よ問ひてをじれを絶水が取井兵主と云翁の傳

けく細布と其機の布七八寸半りある布よりは白鳥の和琴織雜せ  
 紗やあざをして毛布細布をいじて今ハナの名前めむけりほ  
 世主あひゆせりをひくとて我家に織りて云々献之事の多きも織り  
 交ふ事承 其細布をかでやまととあひてやうの内をす方間往來  
 は元家の戸主をきよまひをすめうり近隣をひり辛うじまを  
 こら集てうみを植ゑを作て纺車とけ縄りとまひゆひ一日の所  
 葵宿の力自織りをう例うとりこと分の産のいきとおけは安産席  
 お給すしましもと帯は巻添へ縫すまを坐て思寄うでうと色ひ  
 廉婦の守りとすや名の旅人ほく坐ての奉者と是を乞う家とす  
 さすとそれ織りすとぬめの家とすくまめしとくまくは是をつま  
 せんとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと

下の漆本をさへもとすやうにひまの木が本をにしき木  
めにしき木かはく楓の能紅葉をも本も其辛いがおが木の辛  
木切束ねて一束して秋の夜至りに宿懸想けし女門事と安室  
ゆき木と仲人木て一事をもじらし真澄考るも仲人木錦木と  
し津木もひよ木を彩て幸と小説ぞの木も今子鹿表の時霧得  
えをあづき津を木とせん本もひづみをじき深山楓高多く木  
紫深木もむぢり山賊り方言をもれふひづみをじき仲人木と  
しき木と名付く木とすりせすりせすりせすりせすりせすり  
ひき江糸をて染すを錦木としきれと錦木のまくら名と  
すなり苦木とものさわえゆびの林の木とせん只可りと黄葉せ  
木の味ひから苦けきとせん酸木との子酸りとが名ハ鹽敷樹型と  
俗ぬ木とひすかは木とひすかは木とひすかは木とひすかは木と  
ひすかは木とひすかは木とひすかは木とひすかは木とひすかは木と

ねは櫻木ハあは山櫻の事其皮を剥りてのひよ字と矢作の里の姓  
よもをひはを河ひこち小坐すりも方葉集にほほ半の衣舟とより  
そは櫻木の事は今し蝶夷此櫻の皮を舟生て舟まき水とより  
を事と其事をばとひはとひはとひはとひはとひはとひはとひはと  
そよへとすり皇都大江戸の花肆えすと多し前りもあすけ深本漆葉  
韓楓の形と葉細く尖長時雨葉りに紅のさやと木の叶とれと  
そち赤緋めや木のかく名ハ桃葉衛矛とをえをえをえをえをえを  
の名をきぬり北木とを下束とめぐれ今とそと今とそれ外園の名見め  
そひひもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもと  
ひつよ千束竹ぬとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもと  
錦木とよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもと

古錦本ハ説きを之の又ひもに男女よりして文を以て事ハ取て反覆  
色出をしてその女より口づけありしと思ひて手束にて火  
あらか木より火を合すにあらずちづけなりて折りしるを外す  
灰木を錦本より説きの袖中抄生せりと洗着の灰木を錦本を生  
説き紫の根株生すと錦織よりを焼て灰木の灰汁にて下染むる其  
西郡の木を津軽の山賊八郡より四八郡のものと云ふ錦織氏のもの人の  
苗字をもつて西三河をへていはく同書が來てある在市の多分を  
今代名を布やじせば生むあじきよ戀ももうか古りの物を布ハ  
奥州より出るせは布と云ふ狭字の名せはいしよじもうちれんと  
訓ひて生むせは布と云ふ又細布もすこし郡の名も人説ひす  
奥州より出る郡に生むむじゆいせはいしよじもうちれんと  
はうよをきく所前足のみよもくひそひそとひそひそとひそひそと

又無名秋子不持布ハみのくをもひ色クテ衣。布<sup>アシ</sup>をかねぬのとく  
織<sup>アシ</sup>ウタガ布<sup>アシ</sup>さればは、はとせははにいとまを定<sup>スル</sup>トシ。古記  
説<sup>アシ</sup>其<sup>アシ</sup>君<sup>アシ</sup>を名<sup>ス</sup>をあつてのうがりをもと迷<sup>ハシ</sup>て多<sup>シ</sup>今細布<sup>アシ</sup>織<sup>アシ</sup>家<sup>アシ</sup>下<sup>アシ</sup>高<sup>アシ</sup>  
の黒<sup>アシ</sup>綾<sup>アシ</sup>角<sup>アシ</sup>平<sup>アシ</sup>ヒシ<sup>アシ</sup>兵<sup>アシ</sup>之<sup>アシ</sup>丞<sup>アシ</sup>が子<sup>アシ</sup>兵<sup>アシ</sup>之<sup>アシ</sup>丞<sup>アシ</sup>妻<sup>アシ</sup>老<sup>アシ</sup>獨<sup>アシ</sup>布<sup>アシ</sup>をからこ近<sup>アシ</sup>ま<sup>アシ</sup>る  
うじ錦<sup>アシ</sup>木<sup>アシ</sup>塚<sup>アシ</sup>のき<sup>アシ</sup>む<sup>アシ</sup>松<sup>アシ</sup>中<sup>アシ</sup>一<sup>アシ</sup>戸<sup>アシ</sup>あり<sup>アシ</sup>大湯<sup>アシ</sup>多<sup>シ</sup>南部<sup>アシ</sup>先<sup>アシ</sup>兵<sup>アシ</sup>衛<sup>アシ</sup>領<sup>アシ</sup>家<sup>アシ</sup>士森<sup>アシ</sup>  
武<sup>アシ</sup>八<sup>アシ</sup>九<sup>アシ</sup>人<sup>アシ</sup>居<sup>アシ</sup>此<sup>アシ</sup>東<sup>アシ</sup>錦<sup>アシ</sup>木<sup>アシ</sup>村<sup>アシ</sup>ゆか<sup>アシ</sup>木<sup>アシ</sup>の里<sup>アシ</sup>千<sup>アシ</sup>錦<sup>アシ</sup>本<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>觀<sup>アシ</sup>音<sup>アシ</sup>  
寺<sup>アシ</sup>の縁<sup>アシ</sup>起<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>よのゆ<sup>アシ</sup>す<sup>アシ</sup>り<sup>アシ</sup>と處<sup>アシ</sup>は<sup>アシ</sup>下<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>も<sup>アシ</sup>ハ<sup>アシ</sup>テ<sup>アシ</sup>よ<sup>アシ</sup>れ<sup>アシ</sup>く<sup>アシ</sup>久<sup>アシ</sup>久<sup>アシ</sup>久<sup>アシ</sup>

繪本味比事と寛保二年京師立花堂の筆作一そが中は鞍馬の鈴と  
くらすのとすき鈴りやとぞう石泉法印法性のまの別當とて  
う多くすけれど或人の許つりひまく 北鈴とくまの福と  
さむら者とさればと百ひまをすと北事字治物語と出ですよしら

篠竹やうのゆのりてすゆ風まし山臥すがけ衣をとる。奉  
えこ其のゆかぬうすすまよ多きを贈り之福より多闇の鏡  
福よるをもよとて蠍蛇ももれ折れつばめれば剝事を百足を毛  
うすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす  
鈴二尋入れて画りきむ。あやくもむかへ

かだけやく

南部鹿角毛馬内花輪のありつゝ聖火の山林入も事不思議  
木の名くも半那火あさと先よ風をなで聖をやくも今すくも空き  
火をかきこまん細毛りよひるもすくや

きそくよだ

志木と世檀本ニ岐岨山をすと。南部檀木葉大にて草墨を  
こもふて檀木なり。木あり。木とすまきして木の難直木也。

夷絵詞北木を古に説上草草<sup>サギナ</sup>とあらう。火邊<sup>ヒヂ</sup>よりみのさにひ  
あをりておもやかみある。北木宮木の中は良材<sup>イシカ</sup>にてわづかの寶の  
ひづくとてはあさねすと。奥州征伐記<sup>アリ</sup>。軍書<sup>ムシブ</sup>。文治三年  
三月廿前對州守護實<sup>ミタケ</sup>と賴朝卿の従弟對馬守親光、平氏盛<sup>ヒメ</sup>  
曾<sup>ハシ</sup>隨<sup>スル</sup>其後源平の軍<sup>ハシ</sup>。九州二鳴悉<sup>ツバキ</sup>。主家<sup>ミタケ</sup>。屬<sup>スル</sup>。もしも  
親光<sup>ヒメ</sup>源氏<sup>ハシ</sup>を寄<sup>ス</sup>。尾形三郎為<sup>ス</sup>追出<sup>ス</sup>。九州安住<sup>ハシ</sup>をかくく  
海<sup>ハシ</sup>。渡<sup>ス</sup>。海<sup>ハシ</sup>。宋國<sup>ハシ</sup>。よかほの玉裏<sup>ハシ</sup>をあれ。一箇地<sup>ハシ</sup>。あ  
のとく。親光<sup>ヒメ</sup>弓馬<sup>ハシ</sup>達人<sup>ハシ</sup>。冬<sup>ハシ</sup>。松龍巖<sup>ハシ</sup>のゆす。嫡子太郎親定<sup>ハシ</sup>を聟  
字<sup>ハシ</sup>。字<sup>ハシ</sup>。二品北<sup>ハシ</sup>を仕<sup>ス</sup>。付<sup>ス</sup>。候<sup>ス</sup>。今<sup>ハシ</sup>。少<sup>ハシ</sup>。故國<sup>ハシ</sup>。昔<sup>ハシ</sup>。毛  
はづく作<sup>ス</sup>。づく<sup>ス</sup>。姑<sup>ハシ</sup>。宋王<sup>ハシ</sup>を<sup>ス</sup>。給<sup>ス</sup>。居<sup>ス</sup>。唐<sup>ハシ</sup>。大郎親定<sup>ハシ</sup>其國  
坐<sup>ス</sup>。め給<sup>ス</sup>。親光<sup>ヒメ</sup>。日本<sup>ハシ</sup>。既<sup>ハシ</sup>。終<sup>ス</sup>。事<sup>ハシ</sup>。宋王<sup>ハシ</sup>。せひ。夷人  
モ虎<sup>ハシ</sup>。は其外<sup>ハシ</sup>。珍物<sup>ハシ</sup>。を<sup>ス</sup>。日本<sup>ハシ</sup>。駆<sup>ス</sup>。けれ。さく。又<sup>ハシ</sup>。則<sup>ス</sup>。鎌倉<sup>ハシ</sup>。駆<sup>ス</sup>。

彼品々を献けり北報酬にて宋國のものを品々と和紙等の唐木贈  
親光より之にぞく對州の守護を子るひを宋國の出生嫡孫本郷  
をひび逐ひて家督を受け初に永井を称せり其後り宋對馬守と  
改名され頼朝卿の治世より數百年相續て彼國の大主をひそえり  
ひの木とすこゝ生るれのゆゑ

名ノセラ

奈良の春日山等に在る寶藏を井樓の如くかば井樓組を俗りハ  
リ今南部を栗稗米をあすく多くは俵を以て井樓とめ  
て造り又は板と作りて木を取れ瓦ひいも娘房の高倉も熊の子  
を養ひうつ木をまき組みて一隅柱三本を立て此柱と同様をうね  
れを三本引きせ蔓草すか木をたててよしの校屋のせうの建  
り新猿樂記八御許夫ト飛驒國人也位大友大君檜前杉光傳公首

豊樂院之本圖鑑造殿造宮等ヲ式法云々車宿御厩又倉甲  
藏等ニ上手也云々を名シト义倉レ申倉スガムノメや三河國の医家  
小夜多フ云々而用心得村ニ高りノ堂モカウツヒナ村ナモ  
御意モタモノ銀藏而用心心地ノ事モ校倉モ申藏而用心心  
也ノアモレ

世子佐藤庄司と云ひハシマリには主傳伊勢守に附部  
毛馬内を東三重生徒二里を六里大温湯の郷ノハ三重斗折の皇澤ノミ  
村あつて三み那サユ三寶院神社アリ此社は磨滅たりと棟札あり  
地頭佐藤庄司一頼主ありけりハシマリ古に社を不冬ノ北社年  
舊リ大杉ありケ實政の名を枯レテ放すアリその社守は毛馬内の  
砂塙町の修驗者修善院の話也大温泉のありハシマ佐藤庄司  
の知行今テ鳴らて湯の多シ館あるははすも多カテ湯庄司名あひ

こよかくら

北條九代記より  
北條相模守基時同修理大夫貞顯執權を事に連署す  
其時よへて相模守重時より曾孫を彈正少弼業時より孫りて新別當  
時兼父嫡男なり貞顯よもこれ義時の五男十五郎實泰より而後電  
谷殿と称す温良仁慈の如きあり其子越後守實時より金澤屋住後  
称名寺と号す其子越後守頤時より金澤を家号とし称名寺人  
文庫を立て和漢の群書を集められ内外両典諸史百家醫陰神歌  
世の在るやうの書典ほと残る所す金澤文庫と印をこしり儒書萬部  
佛書と朱印を巻毎に押す講堂壁に絵筆ハ貴賤道俗立籠り  
学文をつらぬき金澤の学校にて舊跡今も残り越後守頤時文  
武学を嗜て書典の癖とぞ年はけ其子貞顯よもを学业のため  
怠らず作文詩章より當時より名を得りし今後は執權の職す居つて  
急ぎお作文詩章より當時より名を得りし今後は執權の職す居つて

耻りかよまくせえけよもしこええりあらも書ひを諒すら海ける  
よきこのじの書ひ氣のつみをよりて事を恐みて藏紙く拙者猫であ  
まわすけ其猫よも尾短く形ゆせぬも三毛班を取てむらぬ  
一も猫を高麗とぞありキ唐より來ありまよもむよもまよも  
りよもむよも猫よもゆうよもと金澤猫のよもよも全よもよも  
家養ひよもよも取ひよも此文庫がよもと徳治始  
まよもハ延慶よもの号のかよもあらや

やまくら

出羽秋田郡大阿仁風張郷今云小近く三利木一葉市三子の梨葉もよも村  
あり天正の始め頃源五郎のちの名より高田源五郎のちの名より後より高田源五郎のちの名より下其名はあねふゆを  
まし戸を梅村左衛門のちの名より四五代を経て梅村市兵衛のちの名より長壽  
家主三代目の梅村市兵衛のちの名よりとす此戸よりまた向銀山の

モレ明應文惠が山口にて天正の頃とまで盛り明應文惠の  
榮活さかはりより一日小百八拾貫泉の自銀を産。天正のころより本省  
中絶なかつせつりて慶長元和二年に日は十四貫八百零よんを獲得し  
是を北山の大直りひびき享保十九年又山つき崩き竊場潰つぶす  
ト向銀山盛りのころに家主鯨戸くじとをひ誰作り山寶を謠  
可かや方かたある。又く北出羽の山口さんぐちから山高さんたかて海近かいぢか谷深たにふか  
浦うらの名處めぐらす。多くして山北銀山山さん左右わに  
金銀山崎さんざき前まへて天下清水の流を汲く人の浮うきする繁榮の  
靈地れいじ大家手ての軒べつゝ多く万民まんみん生うむ。又千代をくりぬる  
の巻まきはひの嶽花の面影心葉おもてやきも冠かんむりの下したお嶽だけは白しらきの  
露熊ゆうじゆうと月の光り山裏川の流れで往むかなみ天あまの羽はきの天狗てんぐば  
春秋しゅしゅうの枝木深ふかかじ荒あら波なみうね波なみうね拂ほく木き

森吉の山高さんたか花はな紅葉こうよう生うきを生うけぬ不盡ふじん玉たまがさう見ええり

みちめく方かた

てじひ甲こう廿じゅう年ねといふのきはうだはう陸軍守りくぐんしゆ音王敬福けいふく生まる  
小田おだ山さんをうかがうるを大朝帝だいとうていと云いひて中納言なかなごん大伴家持おほともいえ  
卿きょう万葉集まんげつしゅよめ政長せいちやう歎かん歌うたあり。主ぬし須賣すまい呂伎能ろきのう御ご代だい佐さ可延こひの等とう阿頭あとう  
麻奈まな流りゅう美知能みちのう久夜麻くやま尔る金花佐きんかさ久く産う山さんの黄金こがね生ます。又また金  
多た女め郎花ろうばなをこどもをしら處ところあゆあゆ大石奥おおいしニシテ肌はだし、  
赤あか鮭ます魚うおよこを文ふみよりあ。鮭ますこがほこがほはあり鮭ます少すくない。鮭ます少すくないの魚うお  
班ばん文ふみのあねあねもうち中なかすこどもほほす。よし。仲なかすこども草くさす  
秋あきよ代だい名なづけ出だ羽はもく。小こひゆ。方言ごんりて。國くにそくは。草くさす  
す。そくす。中なかす。冲うつ在いる金花山きんかさんす。そくす。ごくのこきし敬福けいふくよ

りて今さらこそ北山を掘りえども、ば銀青光禄太夫三位より五万石改めすとて式内御社ありて、黄金山より鳴山ア於焉れく山を詠る山がやと人にはいはざるを考の小在けこうあれど、金掘等は間ハナリ、古今もむじからず山は黄金のおり处あはむし云の仰うて、あす、渡りてみ跡を又みて故ざすいを光の砾石などを素人か手あらひてひらりケ、黄金山と名ふかまつて半弓才小田在於山をもせえほき小田取跡（おとせき）は二きりとせえざりにあき此後語り聞づらさば、こちを守てそり難いあの山をひそむものとぞ、立ちてかめうと仰く事ありとて、金を陸奥中へ運ぶをかひて、幸いあはる津軽路小守てなは北山を生づしめくびは耕田山、岩木嶺は並びて段大嶺を其山古梯形小河嶺をもなづれかふくれ名ふる八峯あれ八耕田

山本山はひよし山とよみふくに近き元部堂は竈場の外詩家好る  
今まハ耕田を甲田ト書りて部よりかずア甲田の山とあらず以故ニ  
ちかくはすりて耕田は山の形ノ斗巣谷田代あり。そこは  
栖家アテ耕ざむをりて字音ふうて改び来る少くもの比畠嶽ハ  
名もの如南部奥懸山、鹿角八湖、色有山、事、鹿角、鹿角山古名と名ある處と多くて多し。又頗る頗  
人錢米等と紙玉包てうち投あし紙捻りちとしとと中筆新著聞  
集い及冬至り湖の凍てハはづれすに七八尋の大鰻鱺魚アリ十尋よ  
以テ龍盤魚代如也。ありまし河熊と小馬のて合ひて是れ歎能ひ。且  
ち播磨國の書写寺は南藏寺。僧智行をかばしにて。多經の行者せよ  
る。てす。其昔もあらず無事主祈小火夢のこも。五重塔を有し。其塔  
わ否破れし處す。半山中道あり。陸地より水岱のむをあそび。捨

さあて多々經を口ひもよみおきて此十灣山よりて左右の普庵  
まちを破るをあゆみ我が住む山をもひよ經をひは湖より  
舟をかすりと南藏坊難藏の石像を作り湖の岸を名を延喜社  
もゆすて願ひあまし此神乎南藏しまをくわゞ身形を鍊ひ志  
く作てまほか翁のこすうのゝ先三国傳記十二釋難藏得不  
生不滅裏をよそに云和云中頃播州書寫山の名より釋難藏  
を法華經持者ある内に經典を誦て懈怠の心外に權  
現たて信して精進の徳あり誦功積て三千部參詣の日重三度之  
然らず難藏心中は念く我生を不替つて弥勒の生世を值遇不憲舊  
けは倩以八月氏立天壇大義雖元日本一州の地圓祝獨就火花是  
是神明權現和光垂跡にて冥助を播し擁護を致へ今政就中  
晉遠公の權宗を嗤ひ来迎盧山の月感を伊采の珍師の密教暗心

遊放淨界の風任も是ニシキ其人の誓願小依故又能野詔ア  
三章山籠を北顧を祈請至るは千日満ける夜白髮老翁御殿よ  
て出で示すを汝の所望可し難り立ても我方便を廻て速達  
關東下向ア常陸北常陸出羽守の譽ヨコヒメと歩と其  
山居住せ弘勸佛下生の其曉よりれども彼僧夢驚て  
後則關東下向がみ山を下り入るよ山花閣錦似潤筆  
藍アラシ頂まで大名池アマニ耳アマツ大なる松木アマツ本木太茂屋乃  
天を歎く其岸よ峙てり池の耳よ大なる松木アマツ本木太茂屋乃  
有けを便すて形のとて草庵不構へり林葉築落朝三の  
食秋風よ満野菓樹生く暮四當春の色濃翁に北居て  
法花經を讀誦する体究仙人の如香煙微アマツ月を礙無く僧  
歩閑て苔を穿アマツ余年を十八九許ある女房倩駄の美質

をも終日ひつゝありしを以て毎日よ讀經を聽聞を恵むを以  
てより日を経ける事ふるよ女の云我希有よ難得妙典と結縁し立障  
の雲忽と晴て東光南方無垢の月と並く三明の露暖すと覺葉西  
利の寶池の蓮は添へり願と我の樓は未詮じく法花經を誦りて  
群類を化導し給ひて難藏義我の神誕生すと此出入口り  
他所へ移りし事叶キ一慈氏の下生を待つと受けた女云妻が  
樓を北池を苦り池のきの龍女之童女の兒と一生よ千佛の出世よ傳  
りゆき又ゆき名吉夫婦の契成を龍花下生を待給へて僧  
思ひけん彼妙莊嚴王の往昔よ真實の菩提を求め王位を  
貪り光榮を愛ひて菩提心を失せ生死の間々往還一鬱頭藍ま  
當初有漏禪定を得く女色工耽り染欲起て悲想定を退す  
空思趣の底沉む何有てに思惟けら是し權現の御方便

も生を轉せまへて慈尊の出世よ值小事了托貯ふれを思ひ  
をやう松柏質、嚴霜を帶て殊更蒲松の姿へ秋風を望て驚  
と立ち進みすりけり是も濟度衆生利益苦海の為こゆ  
詳ひ字を以け候其言は隨て彼池に入りて松を栖むけどある  
よな女難藏は向て立しけど此山の西奴可の巖とよまえ池  
ひづれ此言語の巖を去るより三里ばかり池は八頭の大蛇ある爲妻  
当て一月の間上十日奴可考奴可公孫を字すや今據郡也の池は併  
三下十日此池すめば今アリ来る度き時分多と心得給へり  
教爰は難藏更よ怖れよ氣色せよ即法花八卷を頭上  
戴かれた九頭の龍も成さず已ニかの八頭比龍未よ風飘くと  
しく雨斜々トリ則十九頭龍出合て食合事七日七夜多々  
動搖まほゞ雷の轟く如く刀耀電光々似たり遂八頭龍食入

負て曳て大海入るも然り雖も路子松木生く國より  
叶がりけれ威勢盡きて小身も成り元の奴可の顛の池も入り  
尔け難藏勝事を得て彼女と共に言兩巔に於居りま  
今も山人が池の邊より出れば法華讀誦の声幽々激浪の下に  
聞ゆき走り立入らずり出羽の八龍湖八郎湖もからず一也  
北言兩也今十曲の湖十曲湖に耕田嶽を參了む北十曲の麓よりはいり  
ませけ者を見えまほ津輕の方おほさちかたにさらしく時とき蘿蘿に木木爲く  
會あつ登程おほ、女伴めみも公おうを以て山さんを此山このさんにて登りし  
事あり溪水せきすいを渡れた水みずを月裏つきうちし山さんの水みずに金研きんげん  
小の大石おおいし小石こいし作りつくりひそよ形かたちくまくらくまくらい埋うめめ小石こいしを石いし  
えり。黄金振こがねふり山さん此これを名なづけし耕田こうでんと小田おだ訛なづ小田おだ山さん  
そあめましものくじらくじら山さんをむじまむじましむしむるを山さんに入内いり

村あり青森せいしんの三字みことより近し蛇内へびのうち  
古人内離夷語の村むら古觀世音の堂あり  
小祕佛おひだりしてむづり拜まつりをめぐる者ものあくび持もつくよみ北御室きたごしつ  
内うちをすく又また此觀音このくわんに佛形ぶつぎに作つくし金塊かなを如おほきりのりや  
其重おもえおもりしよしよしよし堂どう年とし堂どうの堂どう形かたちひーま  
小金山華福寺こがねさんかふじより本寺ほんじ号ごう今いま志し唱うたすす金寶きんぼうを川原かわらと  
まま小金澤こがねざわなり以よ山海さんかいの字じありよし近き本ほんに妻めが嶽だけより  
山さんありこと吾妻ごさいを三さんちねくねくすけりやこそを有う六ろく小金山花福寺  
百濟ひゃくざいの敬福けいふく建たて寺てらより黃金山敬福寺こがねさんけいふくじを方言称かたごすよ傳伝て今いま  
あり文字もじをしらうしらうたむし又また觀音くわんに重おも佛形ぶつぎを取とると自然  
金糸きんし金かなををあらあらかたかた化かす座ざ金かなあれあれのここすすを  
を神かみ佛ぶつも齊そろ事ことのれれて水みず入いるるつままりしよのくくんんる  
それを考かんて此觀音このくわん六ろく黃金山神社こがねさんじんじゃをあら小田おだ鳴なる

海中より金花山をこゝまよひしもさざなむてひのう小畠山へりと云ふ  
今す耕田嶽を事じあらず

○阿素蘿神仙

今す仙北郡、舊宋郡ニ仙北<sup>ミツカミ</sup>元郡名あるに雄勝平賀<sup>サハ</sup>半を  
山北三郡と云ひ、むすに山北河を呼び地ニ河北<sup>エムカミ</sup>今之山本郡  
能代<sup>ミタケ</sup>名代<sup>ミタケ</sup>のあたり也す。仙北を山峯<sup>サンマツ</sup>書<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>不祥<sup>フクミ</sup>か故  
字<sup>シ</sup>千福<sup>チホ</sup>書<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>山峯<sup>サンマツ</sup>としと頃<sup>ハシマ</sup>すじ千福<sup>チホ</sup>も一<sup>ヒ</sup>事<sup>シ</sup>  
無住國師<sup>ムジクニシ</sup>石集<sup>シモニ</sup>山峯<sup>サンマツ</sup>をあくべり高<sup>タカ</sup>可<sup>シ</sup>と見え<sup>ス</sup>方<sup>カ</sup>或書<sup>シ</sup>  
守<sup>ムラシ</sup>仙<sup>ミツカミ</sup>冬<sup>ヒナガタ</sup>山北<sup>サンカミ</sup>を仙北<sup>ミツカミ</sup>字音<sup>シメイ</sup>上名<sup>アシメイ</sup>を記<sup>メテ</sup>之の仙  
よし常陸坊<sup>ミツカミ</sup>海存<sup>ミツカミ</sup>冬<sup>ヒナガタ</sup>常陸坊<sup>ミツカミ</sup>海存<sup>ミツカミ</sup>父<sup>アキ</sup>尾張國<sup>ミツカミ</sup>の故道<sup>カミ</sup>知立<sup>ミツカミ</sup>耶  
景<sup>シケン</sup>吉<sup>ヨシ</sup>之<sup>ノ</sup>海存<sup>ミツカミ</sup>尾張<sup>ミツカミ</sup>少<sup>シ</sup>れど童<sup>チ</sup>名<sup>メイ</sup>を小治郎<sup>ミツカミ</sup>唐<sup>カミ</sup>高<sup>タカ</sup>  
此次郎丸<sup>ミツカミ</sup>は其<sup>ノ</sup>生家<sup>ミツカミ</sup>を以<sup>テ</sup>て名<sup>メイ</sup>を心<sup>ス</sup>坊<sup>ミツカミ</sup>付<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>源流<sup>ミツカミ</sup>判官

義経<sup>ヤシキ</sup>七<sup>ナナ</sup>歳<sup>ツ</sup>はうそていま牛若磨<sup>ウガモ</sup>とまでて山科<sup>サンコ</sup>權<sup>クニ</sup>守兼房<sup>カンボウ</sup>家<sup>カミ</sup>  
おへけも小<sup>コ</sup>坊<sup>ボウ</sup>と二條<sup>ニシナ</sup>わ在<sup>リ</sup>をり<sup>ス</sup>訪<sup>ハシマ</sup>ひまわせと牛若<sup>ウガモ</sup>  
平家退<sup>ハシマ</sup>事<sup>シ</sup>を進<sup>ハシマ</sup>ひきて北<sup>ヒタチ</sup>峯<sup>サンマツ</sup>を守<sup>ム</sup>り<sup>ス</sup>おもををもを折<sup>ス</sup>  
まちづあれ常陸坊<sup>ミツカミ</sup>と名<sup>メイ</sup>す。此常陸坊<sup>ミツカミ</sup>仙術<sup>ミツカミ</sup>を得てあひ  
仙北郡奥<sup>ミツカミ</sup>山駒<sup>ミツカミ</sup>嶽<sup>ミツカミ</sup>今<sup>シ</sup>も<sup>レ</sup>仙<sup>ミツカミ</sup>權<sup>クニ</sup>夫<sup>ミツカミ</sup>等<sup>ミツカミ</sup>をもつて不<sup>ハ</sup>事<sup>シ</sup>  
よひあや<sup>ミツカミ</sup>と<sup>ハ</sup>かくま<sup>ス</sup>事<sup>シ</sup>や<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ぞ<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>仙<sup>ミツカミ</sup>星<sup>ミツカミ</sup>の青<sup>ミツカミ</sup>魔<sup>ミツカミ</sup>權<sup>クニ</sup>  
齋<sup>ミツカミ</sup>をもつて常陸坊<sup>ミツカミ</sup>海存<sup>ミツカミ</sup>世<sup>ヒタチ</sup>も<sup>レ</sup>ま<sup>ス</sup>。其<sup>ミツカミ</sup>も<sup>レ</sup>かくま<sup>ス</sup>。其<sup>ミツカミ</sup>も<sup>レ</sup>かくま<sup>ス</sup>。  
神<sup>ミツカミ</sup>と<sup>ハ</sup>かくま<sup>ス</sup>事<sup>シ</sup>や<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ぞ<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>神<sup>ミツカミ</sup>と<sup>ハ</sup>事<sup>シ</sup>を實<sup>ス</sup>。仙<sup>ミツカミ</sup>權<sup>クニ</sup>  
現<sup>ス</sup>。海存<sup>ミツカミ</sup>の生靈<sup>ミツカミ</sup>を齋<sup>ミツカミ</sup>と<sup>ハ</sup>も<sup>レ</sup>かくま<sup>ス</sup>。其<sup>ミツカミ</sup>も<sup>レ</sup>清<sup>ミツカミ</sup>悅<sup>ミツカミ</sup>物語<sup>ミツカミ</sup>子<sup>ミツカミ</sup>の一卷<sup>ミツカミ</sup>  
。其<sup>ミツカミ</sup>も<sup>レ</sup>來<sup>ミツカミ</sup>豫<sup>ミツカミ</sup>川<sup>ミツカミ</sup>の戰<sup>ハシマ</sup>ひの<sup>ス</sup>小<sup>コ</sup>四<sup>シヨウ</sup>郎<sup>ロウ</sup>清<sup>ミツカミ</sup>悅<sup>ミツカミ</sup>云<sup>ハシマ</sup>け人<sup>ミツカミ</sup>高<sup>タカ</sup>館<sup>ミツカミ</sup>城<sup>ミツカミ</sup>籠<sup>ス</sup>  
義經<sup>ヤシキ</sup>の影<sup>ミツカミ</sup>の如<sup>シ</sup>承<sup>ム</sup>。也<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>らきく敵<sup>ミツカミ</sup>あ<sup>シ</sup>も<sup>レ</sup>かくま<sup>ス</sup>。其<sup>ミツカミ</sup>も<sup>レ</sup>かくま<sup>ス</sup>。  
事<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>も<sup>レ</sup>清<sup>ミツカミ</sup>悅<sup>ミツカミ</sup>海存<sup>ミツカミ</sup>外<sup>ミツカミ</sup>直<sup>ミツカミ</sup>習<sup>ハシマ</sup>入<sup>ス</sup>。哭<sup>ハシマ</sup>代<sup>ミツカミ</sup>肉<sup>ミツカミ</sup>生<sup>ス</sup>。すを<sup>シ</sup>是<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>豈<sup>シ</sup>

存命一念ナ清悦へ寛永七年夏頃まで世ニ在りて平泉<sup>清悦</sup>  
 当あひシテ御曹司右衛門太夫を以ての扈從<sup>ノ</sup>等多庄衛門<sup>ノ</sup>近き  
 元和丙午をかず<sup>七百</sup>年<sup>アツ</sup>まで清悦を兵衛の師<sup>ミハセ</sup>にてすせば  
 を明ル<sup>アキシテ</sup>高館ノ名號<sup>ノ</sup>也からむにはゆふれを残し  
 けと申じて其里北野は公廟耳<sup>アリ</sup>と申す多モを心懐にて  
 書すせりしも<sup>アリ</sup>ま黒本<sup>アリ</sup>は多聞の事<sup>アリ</sup>國守中納言政宗<sup>アリ</sup>  
 有<sup>アリ</sup>清悦坊<sup>アリ</sup>喜耶<sup>アリ</sup>清悦坊<sup>アリ</sup>をめね<sup>アリ</sup>汝<sup>アリ</sup>長壽<sup>アリ</sup>が<sup>アリ</sup>公<sup>アリ</sup>  
 使<sup>アリ</sup>九郎判官の筆跡<sup>アリ</sup>拜見<sup>アリ</sup>御事<sup>アリ</sup>朱華<sup>アリ</sup>みつ<sup>アリ</sup>お<sup>アリ</sup>内<sup>アリ</sup>  
 清悦<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>御事<sup>アリ</sup>朱華<sup>アリ</sup>みつ<sup>アリ</sup>お<sup>アリ</sup>内<sup>アリ</sup>  
 義姫<sup>アリ</sup>の事<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>だて<sup>アリ</sup>中納言政宗公坐<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>是<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>是<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>  
 みづ<sup>アリ</sup>さみ終<sup>アリ</sup>六<sup>アリ</sup>清悦坊<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>は<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>の家<sup>アリ</sup>入<sup>アリ</sup>の政宗<sup>アリ</sup>  
 不<sup>アリ</sup>顧<sup>アリ</sup>あれ<sup>アリ</sup>給<sup>アリ</sup>清悦<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>一<sup>アリ</sup>す<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>多<sup>アリ</sup>の事<sup>アリ</sup>余<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>存<sup>アリ</sup>

あざ<sup>アリ</sup>せぞ<sup>アリ</sup>私<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>不<sup>アリ</sup>家<sup>アリ</sup>在<sup>アリ</sup>ほ<sup>アリ</sup>不<sup>アリ</sup>顧<sup>アリ</sup>も<sup>アリ</sup>事<sup>アリ</sup>あり<sup>アリ</sup>が  
 き<sup>アリ</sup>一<sup>アリ</sup>度<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>家<sup>アリ</sup>ハ<sup>アリ</sup>わ<sup>アリ</sup>於<sup>アリ</sup>鑑<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>事<sup>アリ</sup>上<sup>アリ</sup>不<sup>アリ</sup>度<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>う<sup>アリ</sup>  
 は<sup>アリ</sup>も<sup>アリ</sup>於<sup>アリ</sup>や<sup>アリ</sup>れ<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>友<sup>アリ</sup>ひ<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>石<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>い<sup>アリ</sup>す<sup>アリ</sup>度<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>事<sup>アリ</sup>  
 作<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>公<sup>アリ</sup>し<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>そ<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>れ<sup>アリ</sup>能<sup>アリ</sup>あ<sup>アリ</sup>益<sup>アリ</sup>存<sup>アリ</sup>神<sup>アリ</sup>作<sup>アリ</sup>  
 し<sup>アリ</sup>事<sup>アリ</sup>も<sup>アリ</sup>多<sup>アリ</sup>一<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>お<sup>アリ</sup>ド<sup>アリ</sup>今<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>物<sup>アリ</sup>よ<sup>アリ</sup>ほ<sup>アリ</sup>之<sup>アリ</sup>

○  
よ<sup>アリ</sup>う<sup>アリ</sup>え<sup>アリ</sup>つ<sup>アリ</sup>が<sup>アリ</sup>

出羽<sup>アリ</sup>ち<sup>アリ</sup>下<sup>アリ</sup>越<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>山<sup>アリ</sup>子<sup>アリ</sup>河<sup>アリ</sup>邊<sup>アリ</sup>郡<sup>アリ</sup>岩見山<sup>アリ</sup>私<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>其<sup>アリ</sup>山<sup>アリ</sup>  
 小<sup>アリ</sup>あ<sup>アリ</sup>有<sup>アリ</sup>行<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>山賊<sup>アリ</sup>等<sup>アリ</sup>宿<sup>アリ</sup>飯<sup>アリ</sup>椀<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>如<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>其<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>大<sup>アリ</sup>守<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>尽<sup>アリ</sup>  
 の<sup>アリ</sup>柄<sup>アリ</sup>折<sup>アリ</sup>舟<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>其<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>彼<sup>アリ</sup>戸<sup>アリ</sup>生<sup>アリ</sup>何<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>す<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>上<sup>アリ</sup>三<sup>アリ</sup>年<sup>アリ</sup>  
 大<sup>アリ</sup>持<sup>アリ</sup>て<sup>アリ</sup>飯<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>米<sup>アリ</sup>斗<sup>アリ</sup>水<sup>アリ</sup>せ<sup>アリ</sup>是<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>考<sup>アリ</sup>空<sup>アリ</sup>延<sup>アリ</sup>臺<sup>アリ</sup>式<sup>アリ</sup>椀<sup>アリ</sup>形<sup>アリ</sup>世<sup>アリ</sup>  
 中<sup>アリ</sup>モ<sup>アリ</sup>カタ<sup>アリ</sup>下<sup>アリ</sup>北<sup>アリ</sup>模<sup>アリ</sup>形<sup>アリ</sup>貢<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>今<sup>アリ</sup>世<sup>アリ</sup>け<sup>アリ</sup>か<sup>アリ</sup>此<sup>アリ</sup>山<sup>アリ</sup>も<sup>アリ</sup>残<sup>アリ</sup>け<sup>アリ</sup>少<sup>アリ</sup>有<sup>アリ</sup>私<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>常<sup>アリ</sup>少<sup>アリ</sup>折<sup>アリ</sup>舟<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>木<sup>アリ</sup>

日記す。雪車の四乳をそろそろ、全幅六尺五寸、多引出、重出だ。  
事乞國風土墨子より。しはせり

あれど春都より京極の駒本洗馬より家主三四日半  
もあて候るに三月酉の日北諏訪祭又とれ給ひを度ま  
るほども雪高き底まで裏も上り小舟にてゆくと  
人をすり様多くはるゝ事ありての名を山川と云ふ花園山  
中よりつゝの峰ハシタカ山名を山川山と云ふ花園山  
花園山中より山川山名を山川山と云ふ花園山  
山川山名を山川山と云ふ花園山

種の崩<sup>ハシ</sup>る金立<sup>ヒラタ</sup>リテ此教の意<sup>イニ</sup>みづ<sup>ハシ</sup>解<sup>ハシ</sup>ト

### 鶴田浦神

天豐財重日足姫天皇御天皇の御事を以て四年正月甲由朔丙申左大臣筑  
德大臣夏四月阿部臣名率船船師一百八十艘伐蝦夷鶴田<sup>トガタ</sup>渟  
代郡蝦夷<sup>タマリ</sup>望怖乞降是勤車陳船於鶴田<sup>トガタ</sup>鶴田<sup>トガタ</sup>蝦夷<sup>タマリ</sup>恩荷  
進而誓曰不為官軍故持弓矢但奴等性食肉故持若為官軍  
以儲<sup>シテ</sup>鶴田浦神知矣將清白心仕官朝矣仍授恩荷以小<sup>シ</sup>定  
渟代津輕二郡を領遂於有間濱召聚渡鳴蝦夷等大饗而取  
之<sup>シテ</sup>今者之<sup>シテ</sup>おに支々冬下渟代今<sup>シテ</sup>能代<sup>シテ</sup>鶴田今<sup>シテ</sup>番<sup>シテ</sup>渟  
陸奥<sup>シテ</sup>津輕<sup>シテ</sup>積猶<sup>シテ</sup>約<sup>シテ</sup>恩荷<sup>シテ</sup>今<sup>シテ</sup>里鹿<sup>シテ</sup>雄鹿<sup>シテ</sup>壯鹿  
命也守<sup>シテ</sup>たむ<sup>シテ</sup>ハミ<sup>シテ</sup>佐<sup>シテ</sup>蝦夷<sup>タマリ</sup>の長<sup>シテ</sup>の名恩荷<sup>シテ</sup>舊<sup>シテ</sup>  
鶴田浦神<sup>シテ</sup>モ<sup>シテ</sup>今山本郡末代<sup>シテ</sup>名<sup>シテ</sup>向熊代浦落會<sup>シテ</sup>地<sup>シテ</sup>支

出<sup>ハシ</sup>て在<sup>ハシ</sup>宮地<sup>シテ</sup>之<sup>シテ</sup>後<sup>シテ</sup>田村將軍鉢<sup>シテ</sup>旗<sup>シテ</sup>を秘藏<sup>シテ</sup>あ<sup>ハシ</sup>齋<sup>シテ</sup>  
在<sup>ハシ</sup>て蝦夷<sup>タマリ</sup>平八幡<sup>シテ</sup>近<sup>シテ</sup>世<sup>シテ</sup>称<sup>シテ</sup>莫<sup>シテ</sup>ア<sup>ハシ</sup>活<sup>シテ</sup>ち<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>  
こ<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>跡<sup>シテ</sup>あ<sup>ハシ</sup>せ<sup>シテ</sup>今<sup>シテ</sup>お<sup>ハシ</sup>ほ<sup>シテ</sup>い<sup>シテ</sup>水門<sup>シテ</sup>あれ<sup>シテ</sup>神殿<sup>シテ</sup>を能代<sup>シテ</sup>  
漢<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>寺<sup>シテ</sup>お<sup>ハシ</sup>す<sup>シテ</sup>直<sup>シテ</sup>往<sup>シテ</sup>吉<sup>シテ</sup>之<sup>シテ</sup>んを建<sup>シテ</sup>蝦夷<sup>タマリ</sup>平<sup>シテ</sup>神社<sup>シテ</sup>斬<sup>シテ</sup>  
キ<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>キ<sup>シテ</sup>うれ<sup>シテ</sup>此<sup>シテ</sup>浦<sup>シテ</sup>入<sup>シテ</sup>津<sup>シテ</sup>船<sup>シテ</sup>等<sup>シテ</sup>船<sup>シテ</sup>モ<sup>カシ</sup>じ<sup>シテ</sup>祈<sup>シテ</sup>モ<sup>カシ</sup>ひ<sup>シテ</sup>  
沛<sup>シテ</sup>神<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>三<sup>シテ</sup>ノ<sup>シテ</sup>寄附<sup>シテ</sup>大<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>や<sup>シテ</sup>ハ<sup>シ</sup>地主<sup>シテ</sup>加<sup>シテ</sup>寺<sup>シテ</sup>  
古<sup>シテ</sup>蝦夷<sup>退治</sup>社<sup>シテ</sup>神<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>人<sup>シテ</sup>お<sup>ハシ</sup>け<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>く<sup>シテ</sup>彼<sup>シテ</sup>  
之<sup>シテ</sup>事<sup>シテ</sup>あ<sup>ハシ</sup>す<sup>シテ</sup>大<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>二<sup>シテ</sup>王<sup>シテ</sup>門<sup>シテ</sup>あ<sup>ハシ</sup>ひ<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>蝦夷<sup>タマリ</sup>平八幡<sup>シテ</sup>モ<sup>カシ</sup>せ<sup>シテ</sup>ハ<sup>シ</sup>此<sup>シテ</sup>社<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>  
す<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>ひ<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>連<sup>シテ</sup>き<sup>シテ</sup>（佐<sup>シテ</sup>神<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>）添<sup>シテ</sup>よ<sup>シテ</sup>し<sup>シテ</sup>唱<sup>シテ</sup>吟<sup>シテ</sup>能<sup>シテ</sup>  
代<sup>シテ</sup>住<sup>シテ</sup>吉<sup>シテ</sup>之<sup>シテ</sup>公<sup>シテ</sup>持<sup>シテ</sup>け<sup>シテ</sup>神<sup>シテ</sup>儀<sup>シテ</sup>（神<sup>シテ</sup>儀<sup>シテ</sup>）鐘<sup>シテ</sup>如<sup>シテ</sup>御<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>モ<sup>カシ</sup>め<sup>シテ</sup>之<sup>シテ</sup>  
人<sup>シテ</sup>心<sup>シテ</sup>（方<sup>シテ</sup>）お<sup>ハシ</sup>り<sup>シテ</sup>（方<sup>シテ</sup>）渡<sup>シテ</sup>（鷹<sup>シテ</sup>）福<sup>シテ</sup>浦<sup>シテ</sup>（アマニ<sup>シテ</sup>）松<sup>シテ</sup>前<sup>シテ</sup>多<sup>シ</sup>を  
ソ<sup>シテ</sup>お<sup>ハシ</sup>（方<sup>シテ</sup>）有<sup>シテ</sup>間<sup>シテ</sup>瀬<sup>シテ</sup>津<sup>シテ</sup>輕<sup>シテ</sup>の深<sup>シテ</sup>浦<sup>シテ</sup>（アマニ<sup>シテ</sup>）在<sup>シテ</sup>今<sup>シテ</sup>詣<sup>シテ</sup>童<sup>シテ</sup>濱<sup>シテ</sup>東<sup>シテ</sup>の演<sup>シテ</sup>シ

清き直六砂地三字千。授柵養、蝦夷人位一階淳代殿大領  
沙尼具那下或所云授位三階火領宇波安左衛古名。沙尼具那仁納  
特賴。り處あり沙尼具那を詫急語よ。似て柵養食松前東在リ  
古名因入。字をき。あいとすちこゑいもす。秋田郡綏子古名因入。籠石の近島、  
字し。知古奈以てむりし蝦夷村在リ。を。山に。山に。山に。  
蝦夷語の名をゆて。山に。山に。山に。山に。山に。山に。山に。  
ト。津軽の早瀬野村。近く宇婆左頭タチ。と。高宗タチ。の宇婆左頭  
頭の髪のつけよ似。山の。分。小。や。麓。蝦夷作。山に。山に。  
手。渡津軒大領馬武大て上火領青蒜タチ。小て上。と。え。馬武津  
利。住。弘前。り。青蒜通。上往復。豆坂。ま。み。坂。ひ。五歳。各  
方。言。残。す。あ。青蒜。今。南部。糠部。郡。田名。詔。鄉。近。目。多。青  
蒜。村。あり。小。青蒜。詐。傳。山。や。其外。考。得。家。多。して。その。せ。

○七倉の宮室ニ論

出羽國七倉山ヒラタ。地多三七倉外山本郡陀比良山タヒラ。の矢檣ヤヒツ。  
あり。も。古藏山。ある。其外。も。と。ら。聞。る。山の名。琶耶郡北北内。岸  
小繫村。は。七倉山。あり。三七倉。内の。之。管大臣。を。齋。手。南岳。悅山。岸  
書。天神宮。三字。こ。う。は。葉。の額。あり。も。あ。こ。よ。上御。七代御神達  
を。齋。手。天神。称。せ。て。管神。の神像。か。御。今。又。八桓。の神像  
を。齋。手。七代御神達。管神。の神像。か。御。今。又。八桓。の神像  
を。齋。手。小阿仁。の七倉山。小澤田村。在。蘆寺。七倉山。泉通  
寺。を。志。山。岩。モ。寶峯。も。よ。三七倉。の。名。を。と。神威。三十。ノ。萬  
石。の。在。跡。あり。城目。七倉山。今。ハ。島。拿。岡。本。築。城。ま  
聖。山。ま。を。燒。て。神殿。も。灰。く。余。り。今。な。聖。防。翠。御。神。や  
坐。こ。う。ア。カ。正。那。く。神。か。す。み。も。灰。く。而。上。け。す。か。御。さ

主の御坐はよどみの管神の靈像の森林の高木の腰上  
居て今もあやし木はがりのよきとてをひまへかじてか  
拂神の形をかうてを得て此社より神社を造て齋キモト今ニト大河  
の驛の天神トモキモト是ニ三七倉の管大臣の神形に山城國北野の拂神  
を應永元年ニ阿部氏の北山ニ遷て齋キモト筑紫飛律枯木  
ヲ斗神像の裡土籠て天神の神形三柱を白玉都の參理供師作セ  
北管神の靈形を大阿仁莊麻生アマノコトマサヒラ<sub>アマノコトマサヒラ</sub>有之の七倉山セトウサンニモシテ  
ありしらずとじ小擊の柱アシタカナシムリヒ今一柱ハ唐戸カラト七倉山神社園  
城主倉山麓カラト在リ由以テ今一柱は小阿仁庄アマノコトマサヒラ七寶峯セトウサン小齋コトヤにて  
守本寺ムツクニ神社ミツクニあれども小澤田村七倉城主神成三七某再興キシ神  
社を立寒泉七寶峯より涌き流キ麓寺カラト泉涌寺カラト妻帶カミタケのば  
主家ムツクニ高城主神成三七の後見アフタービューカタモイ今加藤氏より號カイ正保

元由年少の頃より神形をあらゆる造りにて三月廿日には祭で  
北郷中の本居の御神とすむをもむじ拵事の御神像<sup>御神像</sup>享保十九年八月小  
加藤政貞が家の記録等をみえりて小經木<sup>木の葉</sup>の御社管査を  
上七代の御神とし称へり。とくに近き世の説を以て然の御神の  
別當里鶯<sup>桂葉の子孫に當事する者</sup>季吟の弟子<sup>子孫</sup>比内の大館よりおよびて能は取て  
山懷といひ日記<sup>日記</sup>とし懷橘がてらふをひて父桂葉の生つてふつ  
ててつてよ古と其名のゆゑふりを橘の中より管社からくと  
見え給ひを舟のうちよりつきて金を貯えりとければえ様のとまづハ  
むほに七倉天神より管神の侍事をやせよとある。

七倉のせ記

七倉天神宮の社のあとに關玉を上げてや天文九年庚戌正月記録よ浅利家の分限帳ありそ中は鹿角両比内南北小繫村上

主義堂より七倉川廻役高士刈小繫三助坐えり

やあての齋杉

今も北山は國界折著山<sup>折橋守山</sup>木<sup>木ノ内</sup>の舊記云五十七代陽成香韋  
松木の北山<sup>北山</sup>木<sup>木ノ内</sup>の舊記云五十七代陽成香韋  
世元慶元年大館城主公家至也同四年臘閏近邊橋吉明云  
者城築住同年五月十四日大館城主公家津輕軍出攻戰敗陣  
時橋吉明居城攻城主橋吉明討取大館兵卒由揚縣松木  
公家弓張征矢一雙是<sup>是</sup>納置其頃矢立松<sup>立松</sup>云うえより  
此書いづるよりのよ在り前末虫をみゆくし大館の郷の古記録に  
書文よりよて名をとすと云ひ

長生のサキヤ

清火納言せき<sup>ハ</sup>横寺<sup>ハ</sup>称め<sup>ハ</sup>駿河<sup>ハ</sup>あか山<sup>モト</sup>に在りし

サキヤ北山はのちはつる俗名をす<sup>サカニ</sup>世<sup>サカニ</sup>の枕草子  
ノ記す

ソク<sup>ハ</sup>の瀧<sup>ハ</sup>アガマ<sup>ハ</sup>葉<sup>ハ</sup>在り

あれはれ<sup>ハ</sup>存<sup>ハ</sup>る<sup>シ</sup>夏九月<sup>ハ</sup>初未<sup>ハ</sup>日の祭見て<sup>シテ</sup>今<sup>ハ</sup>は<sup>シテ</sup>未<sup>ハ</sup>

漆寺<sup>ハ</sup>の前<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>御櫻乃<sup>ハ</sup>葉<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>を集<sup>ハ</sup>ひ候<sup>シテ</sup>も<sup>シ</sup>

枯<sup>ハ</sup>枝<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>うね<sup>シ</sup>寺<sup>ハ</sup>か<sup>シ</sup>信<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>寺<sup>ハ</sup>在<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>

此<sup>ハ</sup>寺<sup>ハ</sup>の上人<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>うね<sup>シ</sup>前<sup>ハ</sup>源<sup>ハ</sup>大<sup>シ</sup>桃<sup>ハ</sup>冬<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>桃<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>勧<sup>シ</sup>  
明王堂<sup>ハ</sup>北<sup>ハ</sup>桃<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>木<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>うね<sup>シ</sup>花<sup>ハ</sup>寺<sup>ハ</sup>の山<sup>ハ</sup>桃<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>の太<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>掌<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>

連<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>せん<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>うね<sup>シ</sup>御<sup>ハ</sup>桃<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>傳<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>

雲<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>つ<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>集<sup>ハ</sup>め<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>うね<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>

衣<sup>ハ</sup>川<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>檢<sup>シ</sup>断<sup>シ</sup>櫻<sup>ハ</sup>秀<sup>シ</sup>衛<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>侍<sup>シ</sup>又<sup>ハ</sup>や<sup>シ</sup>そ<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>うね<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>本<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>び<sup>シ</sup>櫻<sup>ハ</sup>立<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>うね<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>わ<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>も

衣川高源の様子は今あるものよりかゝるに古き波

今も中尊寺入金ばかりの金のみで御堂あるがひき白山神の前  
を既拜殿よりまへてはりれてあひうる馬にしき渡て後殿衆徒  
田樂開口祝詞若女儻老女舞をと遣はれかすらがを舞ふ衆徒  
頭髮結し男をみて、女をいは墨漆の袖をぬりければやめおめ  
さるぐの将軍東ハ國中の事あせぬやうのとくにまきをとづくと  
キ餘りれどもかくよつてまことに其の花が金てねむらをゑん  
はらがうえつゝ居れどもあらまゆるまじめ會ひと移葉杉の林  
落ちるまくわのアツつ心はけやうをと大木の葉の折れぬる事ひ  
頭をこみりうつて木の下を走るやうの附髪賀ひよこねうる扇は  
みゆやれずすわをすし老松紫雲守ありて名付號の空木あればれ  
て枯木斗きういはればするがくとおもすくとみゆも飯を食しに上  
糸慶

櫻にて武藏坊がうなづくを看様にすがおきとすと全ゆくかみ  
さくへ近き中一枯れ木へせしむるをあく高館人舊跡<sup>アート</sup>臺灣  
義經堂ゆゑづく秀衡<sup>シバハ</sup>の枕上<sup>シヤウ</sup>より九郎判官をまきすやあれど君  
世<sup>セ</sup>せ所<sup>レ</sup>給<sup>スル</sup>是をひきえと見るをまふ水をまくしてまくまきを  
得<sup>スル</sup>と錦の袋を判官<sup>シヤウ</sup>渡<sup>ス</sup>義經<sup>イシキ</sup>がいそぎちひき餘<sup>ハ</sup>けし  
佛<sup>ボク</sup>よりあくしててまつ妻子<sup>コノミチ</sup>し今年<sup>カニ</sup>すこり一ぬま<sup>ハ</sup>りとてはま  
まくまく首を落<sup>ス</sup>て贈<sup>フ</sup>つゝハ蝶房<sup>ヒメイ</sup>鳴<sup>ハ</sup>わらひと身<sup>ハ</sup>伊達<sup>イタツ</sup>追<sup>ハ</sup>郎<sup>ヲ</sup>奉<sup>ハ</sup>衡<sup>シヤウ</sup>  
君<sup>ノ</sup>跡<sup>ヲ</sup>まくひそ<sup>ハ</sup>じ出羽<sup>ミズナ</sup>よりて河田<sup>カタハ</sup>よりしをと北<sup>カハ</sup>君<sup>ノ</sup>靈像<sup>リヨウジヤウ</sup>をえつ  
ひじを語<sup>ハ</sup>りて船<sup>ヲ</sup>を賣<sup>フ</sup>此夜<sup>ハ</sup>於<sup>アリ</sup>平泉<sup>ヲ</sup>泊<sup>ム</sup>十日<sup>リ</sup>少<sup>シ</sup>すが<sup>ハ</sup>ありと  
レ<sup>ハ</sup>すあやの花<sup>ハ</sup>ちと残<sup>ス</sup>い見る<sup>ハ</sup>すやめ<sup>ハ</sup>平泉<sup>ヲ</sup>もと<sup>ハ</sup>達<sup>ツ</sup>谷<sup>ヲ</sup>  
の屋<sup>ヲ</sup>入<sup>リ</sup>てかひ百鉢<sup>ハ</sup>多門天<sup>ヲ</sup>見<sup>ハ</sup>ば<sup>ミ</sup>をとれせずとも<sup>ハ</sup>斗<sup>ハ</sup>残<sup>ス</sup>り<sup>ハ</sup>春<sup>ヲ</sup>  
見<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>をけられ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>不<sup>可</sup>と多<sup>シ</sup>名<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>樺原<sup>ノ</sup>花<sup>ヲ</sup>以<sup>ハ</sup>み<sup>シ</sup>む

むり葉室中納言某卿の娘を恩路王のまみり北姫、むかし北窓  
少蘿り栖むを都、りふくらむまつて來、の西路王のひらはお寺姫小賄家  
こゝ大横刀をぬくひ、うばびを来、都、おぬすよけいきとぞのままで  
原の花あり、まよやうれく姫をさとひ窟を生て此花ゆきと洒  
いそ候、候をひとをゆきとみきみの姫君、いひこなほくをほくし  
金をあくまかう立里村より來、嚴美神社の舊宿跡、瑞玉山に残り  
今はここを水山村の山王窟、とせ十四代鳥羽院の元永保安のころを  
北御世は開山の中尊寺を今い上泉野にはれりこそ平泉野と云  
あらに大日山中尊寺の跡、もと高森山法福寺の跡、もと栗駒山法華寺の  
跡、尼寺(北尾寺の事)興法師の跡、骨寺(今寺)の跡、圓住法師の庵の跡、逆巣  
山をいふまが、今、の關山中尊寺のちからゆきまじば山よりみて、ひたを  
すてみる名ゆむり、美麗瀧て其名高し今、まくらを岩川に臨じまくら

山中瀧とひのこにては岩の中を岩ぬれ岩せんを流すと後年  
な引水をやうにすまほあはめしを文玉の瀧といふもひを小松  
瀧より京田瀧あら瀧大瀧童子瀧とれ瀧東谷瀧麻せ瀧  
えむかふて立串の瀧とりこゆく御山岸み桃山吹柳枝と交せ  
ゑとて居たまふたりてア

落泥つ波沙くくぬちりくじゆくを筆えぐなりじ  
見立ギクル仰わきバあくじしき田の山うちを山目いづく注連  
えくね葉よ幣キトテキハ水口祭セラフ  
えむロヒテ珍祈時ひよ五串の小田ますのねぐら  
今を別く山目は来る盤井郡の保長大槻清雄が清雄が訪だあめ  
金をかくとあらわの太郎がけく清古筆をりて跡り余りを待  
えて時鳥安がくの意のからくと短冊尺セリケス

めほんとおはなをかみやくまがわらすのよ

はるかに葉の名をかへ

此神社は残された古社の跡で山の神風も吹つゝまゝに心葉  
尔遠くのをうなぐすとよしとくねばむき茎をひらは居てあふた  
のあみがくの諸人のにはかの屋の圓居のそとよ平生をも爲さ  
てとくり木本集ええりとむとくにてくにて大根のむと眼をまく  
林森の山の香り夏木立のゆれじゆきはるきはる

前より七倉の事より、いそしきりければあらびよきを七倉へ前を流  
加称久良川より崖より七倉山あり。そに松倉大倉三本杉倉柴倉箕倉  
鳥帽子倉獅子倉度面より獅子頭を形どり此あり。獅子頭を權現倉也。又正面倉也。云人大り七倉ニモ  
七倉よりソモシ里鶯翁入日記の事より下さりに古河より來て、  
原本を走りつゝを経て明りす。山房より云々寛永元年九月末に入  
云後羽陽秋田の北より大館より云々北大館より塔の子城あり其子城城主

筆の力六二

廿五

義方君於此に此義方君予は歌書をまかれて此を來ゆれば  
 ひしもひきほりあらびまく飯村林翠が方へ集り、彼林翠予が方へ  
 かくよい告白はるかにじく神無月廿日の大龍寺城主むじを  
 家文桂葉まみをむけ花をかほけ詠すを重吟一首詠をつゝ  
 家の大人よ生まることを背す大館人柵を發足す扇甲よりとち  
 さう詠すをふせきと侍けよを電臺にうけぬ旅衣こなめ  
 珠をまかてやまかて袖あらわしに山の藤をきけ東岸の  
 ねむよお管社一字からくもまて舟すくもてれあひ一首をほゞとて  
 ぬよかてれまつゝ神垣やあすする雲の上に水きよくすくも  
 風のよく舟揚こまみやうして我院かよれ日ひ柰樹が波  
 えく木よ蝶菴里鶯述えうえうり里鶯其頃の草オレキノ  
 大館綴子翁田をよしよお子タタク江戸ノ雉橋在向寧まひ師美

大峯の飯と一日物語て一日清話集編ます雄鹿は往く日陰草  
 を埋れ水の函巻をあらそひ古の手写つとけあはるの筆によほ  
 かじ道芸花語まひりを傳ふ筆の跡あれもあり一ナリはまく  
 七倉天神宮をかよひ七代の佛袖草は寶永二年八人の筆をしる書  
 が管社二字を書ふをうる近世妄想の説を知り迷ひどぐ  
 ほせく万やま

奈秋田郡阿仁莊露隠山より岩山あり春秋とわきて石りんき  
 山なり瀧落ち川の流れあり谷の目もたまひ地唯細谷水の  
 草を取る音すとて林に獵士岩より走り狗岩より下りて磨口宣大  
 を引ひて白熊を追ひ走ける能く神奈を守りけし空をえり往方を  
 あらが太義も世多も息盡す死すをかきかき多可存命多可  
 美濃國立山根津神平放鷹を追ひ走り大やまとさかく死れ

りの達子はる方太宜て事に古科剥子麻木の皮を以て其級を  
利て縄は線で布も織り、縄は斗して用ひ葉す、山賊等を手錆  
にて山に入りて何んて云れ獸をえがまし是を捕り、獵を禁り野あれば  
獵を業とするは鉢の柄を身に山鑓を隠して級剥を身傷で山入り  
せりかども今と出羽陸奥の獵者の目とみて又鬼が書表を以て無不  
忌諱にして多く多し笠を雨蓋、米を莫れ實、獵物の肉を幸肉、茶を夢茶を  
祁良及せし蓑を身にし解り祁羅といふと白鷹を露祁羅と云ふ古言す  
狗を世名い六蝦夷語、肉を幸の肉といふ山幸り牛肉とも御内  
磐の岩壁看る獵師の姿を一岩の字を世名ありし今公之け  
し半毛熊を露熊ぞ、ひこてん白熊の山の名をも負ふ山室を  
おほき屋敷りを祁羅といふ肩蓑の事、蝶蛇す裏羽を肩斗す  
その形、ぬれ雨衣をねぶ分良蓑を畠合さへりいひけるをわらひたま  
皇恩

露熊山の紅葉見上りて御宿へ至りて御宿山横嶺より佛形巖を  
はり三なよらかに奥より伏陰山より村山より下りて御宿  
伏陰節掛を下りて節懸山等前範山等御外御下りて御宿  
金子の參じてあめ其事西園寺の春草の巻よほほ

○もよの夜鶴

深山奥表更々鶴の鳴事ありゆすと猪形日記記せり三声  
中へり小音出羽雄勝郡の七葉樹温泉東ノ山ノ秋郡杜良坂  
角ノ山ノ同郡太平山の女童子中へり小音小鶴の鳴ふと化一恩  
つむ半武家俗說詳古戰場より心懲靈出で妖怪と傳云保云惟理大  
全南軒張氏向在淮上宿一小寺夜聞小鶴聲以殺萬起計觀望燈  
明滿地間寺僧云北舊戰場也遇天氣陰晦則有此音冬りあり此  
事あり中身考山は牛鶴松鶴をとある名からと有りなり

○石神山

陸奥國境近く虎毛山牛尾山大高森山<sup>伊豆</sup>山黃金原駒形山馬草  
巖をとすもあひどり駒形山みちはすと石袖山<sup>伊豆</sup>秀野  
山は石像あらず此石神山の麓は出羽國雄勝郡櫟温泉より石神古祀  
名地續紀卅卷延暦八年<sup>壬午</sup>ニ亥陸奥國里川郡石神山社並為官社  
とぞり其頃は官軍とさげて通行あしとびり満願の報祭  
をもや其社を官社と守り給ひてし北事駒形日記秋山鳥<sup>伊豆</sup>詠  
きあれはまし若葉かみせ日月よりよそへばき石ノ神  
とて大原生在すまくひく阿部比羅夫虫磨<sup>伊豆</sup>とよより詠はま  
まし黒麻呂朝臣の詠歌すとまきをと方代けてほづけ石神の惠  
大原の里生とこそむじぬまきをとが北神社と見觀の八城國大原野  
の御神を遷坐すて續名山大原寺を圓珍禪師闢<sup>伊豆</sup>給寺地<sup>伊豆</sup>藥師佛

清衡豊田館より平泉に移り住て鬼門中を祈し延圓仁作の佛事  
文德天皇仁壽二年三月未七月陸奥國アシカニ石神は徒佐集を授給シムサス  
北神の御事カミノウジと東京寺の神錄カミノロクよりあれらをさき歌の手向  
治水カムシマツ代カマシマツ坐カマシマツて石カマシマツこりぬカマシマツゆカマシマツとカマシマツ

雄勝郡根杉山の背カタマリを足倉山アシカニと爪白ハタヒロの鷦セキつセキ脚カタマリ坐カマシマツて  
和カナヘを詠カタマリいあカタマリじ續紀世卷天宗高紹天皇アシカニ四ヨリ九クシ代カマシマツ皇カマシマツ寶カマシマツ鶴カマシマツ  
土カタマリ背カタマリ庚子征東使奏曰云カタマリ遣カタマリ三千兵經畧カタマリ鷦座カタマリ指座カタマリ指石カタマリ  
澤大官屋カタマリ桺澤等立道カタマリ足倉アシカニと足倉アシカニ山倉アシカニ不カタマリ立  
志カタマリ名カタマリ是カタマリ之カタマリりカタマリ記カタマリ多カタマリ雄勝郡アシカニ山カタマリ人事カタマリは  
之カタマリ書カタマリ集カタマリ推葉日記カタマリあり

### ○平戈山

陸奥國アシカニ膽澤郡アシカニ駒形カタマリの神山アシカニ同國東京郡アシカニよ石カタマリ鷲尾鉢カタマリの山カタマリ藏カタマリ  
をすカタマリ平戈山アシカニいせ說カタマリあるかの人口内カタマリアシカニテ體廣言カタマリの事  
記カタマリ中カタマリ神室カタマリ嵩カタマリの山脚カタマリ戈カタマリ石カタマリ兜カタマリ金カタマリ之カタマリ此神室カタマリ獄  
出羽カタマリ陸奥アシカニ跨カタマリ於大嵩カタマリ續紀世卷カタマリ之カタマリ上カタマリ年カタマリ奉カタマリ從玉  
野カタマリ至カタマリ賊地カタマリ比羅保許カタマリ山八十里カタマリ地勢平垣カタマリ無有危峻カタマリ秋深等カタマリ曰徒羅  
保許山カタマリ至カタマリ雄勝村カタマリ五十餘里カタマリ其間平也唯有兩河カタマリ海至カタマリ水漲並用  
船渡カタマリ云カタマリ天平寶字三年正月云カタマリ造陸奥國桃生城カタマリ崇國雄勝城カタマリ始置出羽國雄勝平鹿二郡玉野壁翼カタマリ玉戈獨河雄勝助河並陸奥  
國嶺基等驛家カタマリ之カタマリ入カタマリ北山踰カタマリ今入カタマリ之カタマリ古道カタマリ也カタマリ木涿カタマリ  
改カタマリ峯崩れ谷カタマリ之カタマリ松山カタマリ之カタマリ行カタマリ之カタマリ山カタマリ也カタマリ也カタマリ

### ○都流宣涅

筆の万年二

廿九

阿佐莊杜良嵩墓より似、比企ヶ嶽も又蛇を神の御使と見る  
人有る。暮のあづみを見て恐れて止むを多々有り。秋郡大江平嵩今  
彦太平山よりひとに太平山よりは古蛇野莊は在る。大嶽麓の大  
聖は蛇より多くり。今八田ひげり北山の峯、蛇頭は似て尾は劍峯也  
在る。神の蛇を祀りやめずには、蛇野村あり。舊の神大美  
山神よりあるとし給て云ふ。蛇の墓の手ててててててててててて  
北畠高氏の小彦名命を齋す。本地堂ハ薬師佛を安置す。  
一ノセの秋太平嵩は臺草と。紀小雨をかぶりて、雪ぬりて峯灰よ  
そぞわびと見る。笠置山劍峯をの尾上に三の道はく見えりバ  
をうち山並れと三段よきとこえく尾り。此が劍峯  
ゆ本一事あり。陸奥國の鶴曾禮より秋の和子、雪あり。温壽  
浴り其駒の山の麓をかけぬるより寒け入

多勢家にのりハキラは久也もつ抜きの者山ナ  
事ナ事ナ事ナ事ナ事ナ事ナ事ナ事ナ事ナ事ナ  
是を考小姓氏錄葛木忌寸高御魂命立世孫劍根命之後  
セニズアヌ根人劍峯之不盡根セニの事ナ屋标家峯  
屋の棟上に黄泉ナシナナシナ此世ノ劍山ナシナナシナ登ナ  
テナハシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナ

今世人多好之加羅不登一唐玉在其鳴遠嶺ら御身の御寫  
て松前より至りてはくの鑄玉をも中少青清くもひふ等  
又せば今より是を佩玉せしもいと比玉を貴るかや孝元天皇の  
御卷は河内國の青玉繫を乞い娘あり事なり今レ蝦夷の  
妻ニ斯膝宜申しあはぐのもやつゆき首より以持くまほん

五百箇御統の瓊を經ひうすがせぬまからんのゆゑをも事  
古渡の韓太の玉と色と青いつやかよソハラモたえども今ノ夕  
子のなりよへてあり

卷之三

いはの子雄勝郡若狭村の奥山郷を兜野新田  
泊りて外のよりとあれば老とも刀自ひ声して今も鷺田鳥も必ず  
争ふといふるやうを下の田鷺苗畠によ群れあつた  
世より蒲太鳥とよばれて肉食をむねば鳥の名を失ひ鳥の跡  
に木の實草の実生むる畠鳥を下すを御幸鷺といふ姓氏録上  
神理神の孫鷺武津之身命八咫鳥也化りて神武天皇を導き  
給ひ事えどり御幸鷺に御前鳥リテミハ八咫鳥也のことを  
鳥を御幸鷺といひもあらずかと云ひて山里をよ古もひて残げしもの

霞箇岳

三代實錄廿五卷元慶三年正月云勅舊出羽國關授出羽國俘囚  
外正三位下深江考雄勝郡三門外從三位下外正三位下大辟法作貞九  
並外從五位下賞重功也云春泉未達鎮守府之間去年九月十五日  
好薩來自流霞路考俚人某長幹某長根不事耕種何無此處也  
音春風来自上津野考今上庄里南部主布里是時道路泥深風寒肅烈經渴廻避  
士卒瘦劣云々入冬而流霞路止於此不外乎雲霞長峯之傳也  
霞長峯霞長峯今北比内之表の移りに於山冀之跡を多於等と  
少しだまく表が岳は山あれば在り舊地をいひて出羽工  
往復古道あり霞長峯も霞長岳も文筋か人或緣起云舊社有小  
宮其村名云本宮奥州栗原郡一迫莊文字村古喜勝霞谷岳在于保呂羽  
權現宮中謂之若兒大明神出羽由利郡保最勝山天國寺栗原吉親遊行北麓會  
筑師遠藤太郎大同年中建立出羽勝由利平尾

兩郡或云金峯者天平寶字年中吉野山齋祠  
安閑齋故名藏王權現云ことえりす保呂羽山ノ寄町の東山の  
あひやレヒトカタエタリ御前モ氣氣岡アミ岳原れ所安其  
吉勝郡文字村ノ山をアミカムメ

久比方美夜

陸奥國駒形山古緣起云神室山嶠宮駒形莊在於松岡村吉野瑞崎  
云松岡山所祭神坐素盞鳴尊或合祭大旦靈尊謂之嶠大明神小宮  
猶在祭日別當空乞アカルシテトナムシキタスル處二月七日主北村北村也アカルシテ  
アカルシテ人ノタル翌日主齋内アカルシテ年禮アカルシテ内アカルシテ村はトナムシキタスルを捕ハサウ人  
濁酒飽アカルシテ飲アカルシテ蕃叔アカルシテ末アカルシテ寒泉アカルシテ饅アカルシテ事アカルシテ嶠宮の  
餘風アカルシテモアカルシテ宵四日アカルシテ忘夜アカルシテ人夜籠アカルシテよよ孤火アカルシテ出アカルシテ巻アカルシテ  
孤臣火アカルシテ孤火多アカルシテ火アカルシテ稻アカルシテ主子の除アカルシテ火アカルシテよよ孤火アカルシテ出アカルシテ巻アカルシテ  
モ北山アカルシテモアカルシテ大山アカルシテモアカルシテ七葉樹アカルシテ實多アカルシテむすむ石アカルシテモアカルシテ石碑アカルシテ之

橡アカルシテモアカルシテ木アカルシテ疫神アカルシテ北山アカルシテ御神礪アカルシテうちアカルシテ給アカルシテハ北橡アカルシテの実アカルシテ落アカルシテ事アカルシテモアカルシテ木アカルシテ松罫山アカルシテモアカルシテ木アカルシテ

を波アカルシテ田

大鷦鷯天皇仁德帝アカルシテの御世辛羊蝦夷發アカルシテ田道アカルシテ營アカルシテト撃アカルシテ給アカルシテ小  
田道アカルシテ蠻夷アカルシテノムアカルシテ敗アカルシテれ伊寺水門アカルシテ死アカルシテ従者アカルシテ田道アカルシテ毛纏アカルシテ取アカルシテて  
其妻アカルシテ妻毛纏アカルシテ取アカルシテ抱アカルシテ縊アカルシテ死アカルシテ生アカルシテ命アカルシテ令アカルシテ折アカルシテ命アカルシテ死アカルシテ夫アカルシテ  
えアカルシテもアカルシテ蝦夷アカルシテ襲アカルシテ來アカルシテ農民アカルシテをアカルシテ蝦夷アカルシテ田道アカルシテ墓アカルシテ根アカルシテ土  
蛇アカルシテ出アカルシテ目アカルシテ口アカルシテ蝦夷アカルシテ皆アカルシテ死アカルシテ考アカルシテ本アカルシテ石卷アカルシテの邊アカルシテ  
鹽アカルシテノ御アカルシテ也アカルシテ此アカルシテをアカルシテ田アカルシテ毛アカルシテ放アカルシテ夫アカルシテ也アカルシテ地アカルシテ存アカルシテ名アカルシテ

メテ記アカルシテメテ

天明三年八月辰の飢渴アカルシテ田アカルシテ実アカルシテ皆アカルシテ飢饉アカルシテ也アカルシテ津路アカルシテ也アカルシテ

筆の万葉アカルシテ二

少くともまちの路往きぬれずて死ぬる教を寺まで木の実  
草の根をほこぬ。西と山のことを極て歸りては馬をさへあ  
肉を味ひて金をつぎ後、ハ馬の肉を烹て市販。陸魚と名附。椀哉  
と呼す。奴す。ノ人馬をひそみ山隠。足繩をひそひら。耳  
をぬきり湯を浴びぬく。うねる人の活けい。仰のゆきは死馬を靈  
の上捨り。北馬の肉捕らずて男女手よ山刀菜刀を持て桶をかく。叩  
子のよけり入らずてきわめきむ是も血よまめらををだすときある。  
さま人の世や。まよまよてかねきめをそそぎて取らす。よそをかう。お  
ほく松前島浦々人蝦夷人助れり。うなぎを食ひ。妻を娶る事  
ほめや。あすい。其子多男。髪を切り。蝦夷人ふ混雜て居て。山  
鬃。短眼。申れども。蝦夷のいふ。うそをすそを分中。額。一字を黒じ  
十字を白。よ。多。蝦夷の。本。蝦夷人。か。鴨の。法。冷を犯。寒

因の内よ。ひよ。其罪の。きり。す。亦す。在と。を。か。せ。其。身  
を。も。す。こ。き。を。越。す。西。ま。れ。東。ま。れ。之。今。を。那。ハ。こ。き。を。考。す  
履。中。香。皇。御。代。堺。主。は。あ。れ。ひ。と。し。給。し。科。書。う。わ。り。こ。の。を。黒。ト  
立。ひ。し。人。野。鷹。の。海。の。罪。モ。北。鷹。公。鳴。キ。法。や。古。風。残。ト。カ。レ  
セ。ラ。ア。ミ。

出羽陸奥の。家の。俗。多く。女。辞。温泉。か。事。を。湯。川。往。き。す。  
み。あ。よ。む。あ。き。す。ほ。と。く。沐。浴。築。成。今。名。ち。せ。す。爲。盟。神。探。湯。と  
見。え。べ。り。ト。り。お。き。詞。

み。ふ。

倭訓采に鷹をしたばき義執鷹猛を称せ或高祖もこれ名く  
聖鷹揚意之空もす。蝦夷よ。こ。ち。ぬ。見えり直證考す  
鷹古手養食のは。ふ。く。詔。す。手。ふ。ま。を。養。す。か。れ。ま。い。ふ。や。

やうじや

出羽國南比内莊の山御少<sup>サムライ</sup>人を火葬たゞ跡<sup>アツメ</sup>は三喬<sup>ミヤコ</sup>て三本の木を  
三架<sup>サンカ</sup>小結<sup>コウザク</sup>ひな自在鍵<sup>サザエノカギ</sup>下<sup>シ</sup>すを釣<sup>ハシル</sup>やうの三脚<sup>サンカ</sup>の膝<sup>ハタ</sup>古<sup>ヲ</sup>鍔<sup>カイ</sup>を打掛<sup>ハマハシル</sup>  
モニ二尺<sup>ニシキ</sup>あまりの細<sup>スリ</sup>木を弓<sup>クサガシ</sup>中<sup>ミ</sup>一級<sup>イチケイ</sup>の弦<sup>ツネ</sup>張<sup>ハシル</sup>篠<sup>スズ</sup>の箭<sup>クサガシ</sup>前<sup>マサニ</sup>一枚<sup>イチ</sup>の羽<sup>ヒ</sup>を丸  
き<sup>ハシル</sup>ひに<sup>ハシル</sup>あひに<sup>ハシル</sup>これ<sup>ハシル</sup>を北<sup>カミ</sup>むけ<sup>ハシル</sup>と名<sup>ハシル</sup>ちよ<sup>ハシル</sup>すの<sup>ハシル</sup>御<sup>ハシル</sup>りそ<sup>ハシル</sup>ゆ<sup>ハシル</sup> 蝦夷<sup>ハタケイ</sup>の<sup>ハシル</sup>人<sup>ハシル</sup>を葬<sup>ハシル</sup>爲<sup>ハシル</sup>塚<sup>ハシル</sup>も鍛<sup>ハシル</sup>を<sup>ハシル</sup>たりす<sup>ハシル</sup>し<sup>ハシル</sup>蝦夷<sup>ハタケイ</sup>人<sup>ハシル</sup>妻<sup>ハシル</sup>死<sup>ハシル</sup>去<sup>ハシル</sup>まれ<sup>ハシル</sup>ハ  
其<sup>ハシル</sup>家<sup>ハシル</sup>を<sup>ハシル</sup>き<sup>ハシル</sup>や<sup>ハシル</sup>多<sup>ハシル</sup>や<sup>ハシル</sup>火<sup>ハシル</sup>を<sup>ハシル</sup>か<sup>ハシル</sup>ち<sup>ハシル</sup>や<sup>ハシル</sup>ま<sup>ハシル</sup>く<sup>ハシル</sup>妻<sup>ハシル</sup>埋<sup>ハシル</sup>み<sup>ハシル</sup>塚<sup>ハシル</sup>の上<sup>ハシル</sup>三<sup>ハシル</sup>脚<sup>ハシル</sup>を<sup>ハシル</sup>造<sup>ハシル</sup>や  
自在鍵<sup>サザエノカギ</sup>釣<sup>ハシル</sup>小<sup>ハシル</sup>鍋<sup>ハシル</sup>け<sup>ハシル</sup>り比<sup>ハシル</sup>内<sup>ハシル</sup>の山里<sup>ハシル</sup>の<sup>ハシル</sup>ハバ<sup>ハシル</sup>や似<sup>ハシル</sup>水<sup>ハシル</sup>鍵<sup>ハシル</sup>釣<sup>ハシル</sup>小<sup>ハシル</sup>鍋<sup>ハシル</sup>  
相<sup>ハシル</sup>見<sup>ハシル</sup>其<sup>ハシル</sup>妹<sup>ハシル</sup>伊那<sup>ハシル</sup>美<sup>ハシル</sup>命<sup>ハシル</sup>五<sup>ハシル</sup>才<sup>ハシル</sup>三<sup>ハシル</sup>足<sup>ハシル</sup>と<sup>ハシル</sup>つれ<sup>ハシル</sup>り國<sup>ハシル</sup>に<sup>ハシル</sup>作<sup>ハシル</sup>せ<sup>ハシル</sup>す<sup>ハシル</sup>あれ<sup>ハシル</sup>  
還<sup>ハシル</sup>ま<sup>ハシル</sup>ま<sup>ハシル</sup>や<sup>ハシル</sup>お<sup>ハシル</sup>ひ<sup>ハシル</sup>き<sup>ハシル</sup>伊那<sup>ハシル</sup>美<sup>ハシル</sup>命<sup>ハシル</sup>を<sup>ハシル</sup>父<sup>ハシル</sup>子<sup>ハシル</sup>く<sup>ハシル</sup>女<sup>ハシル</sup>キ<sup>ハシル</sup>く<sup>ハシル</sup>ま<sup>ハシル</sup>  
ま<sup>ハシル</sup>吉<sup>ハシル</sup>父<sup>ハシル</sup>子<sup>ハシル</sup>合<sup>ハシル</sup>ひ<sup>ハシル</sup>ち<sup>ハシル</sup>こ<sup>ハシル</sup>え<sup>ハシル</sup>ト傳<sup>ハシル</sup>不<sup>ハシル</sup>連<sup>ハシル</sup>未<sup>ハシル</sup>北<sup>ハシル</sup>受<sup>ハシル</sup>立<sup>ハシル</sup>悔<sup>ハシル</sup>急<sup>ハシル</sup>乃<sup>ハシル</sup>

梓ノリ万葉三トトロニ速來而母見手益物半山背高櫻村散去奚留鴨  
黄泉戸喫書紀小浪泉之窟北云與母津俳遇比空房開室六即  
窟のよ處り戸字を書く窟を本ノイ民戸ノ然故有ナオサエ黄泉戸  
喫少ハ黄泉國の窟にて者啖ム物を食をテ是余火と忌清  
む事は本アリけム空足えド此鍋をつ鍵を作ラセ黄泉戸喫の  
こちナシメア材簾リテ煮饭セシムカシモ前後ノ事ニテ此  
掛ケ弓も桃の木あれ近きことと何の本まれガ曲作シソテヒタメ  
坂本多利子三ミツアリトトウ名あレハバモドキ逃げ逐さシアコヤハ  
シテ桃の弓あり笑テ泉津醜女をうちやうめすもレ倭訓琴  
レその中に古事記本已笑トスセモ上総の俗人死モ人作ケリ  
矢を造リ門掛ケ忌中を知テ是を忌屋謹シモアタスナリ秋畠ノ  
比内山里シテアタスナリ秋畠ノ

## 阿波岐原

古事記傳六卷七十到坐竺繫日向之橋小門ア波岐原三字  
 原而禊也云々少あり傳立卷葉小引如云此考小依重きは竺  
 紫中ハ九國の總名多モ右の二の考何を主めし決後今ノ御書紀神  
 功卷此ノ日向國橋小門セシテ次ケリテ姑く國名の方就キ比空加  
訓此神功蓋空ノ北半加比乃國也謂信義也橋小門書紀火折尊段  
 小半北地名見えを同處多々信一アテ日向國より地名物見えに  
 古大隅薩摩の地等々分筆々日向中々其國之小丘見石更  
 を阿波岐原岐を濱より清流也書紀より禊原也と云い禊此云阿波岐  
 原和名抄より説文云禊梓之屬也日本紀私説云阿波木今按禊  
 木一名也見尔雅注云あれハ北樹今世云阿波木也云物乎猶也在海  
 之原平丁ちよんえり直登考より橋禊原ニ云北橋亭近き

のそれノ字をあてて云橋と再注より原氏の説筑前國糟屋郡立  
 花立裏あり又席田郡立早良郡小里青木村立海辺町立  
 亨立信此御禊成り坐於墨江大神又志加海神の鎮座於彼國  
 云れ由來云々覚西と見えり其立花之地也土師窯今立横  
 岬を立木多し青木立之名も多き地名也青木之禊檣立安久也  
 ありト青沖やあだり立岬青澳原をむしまく海辺十船坐えて  
 其意を察く古意に近ひ

文政六年七月

癸未の夏

秋田乃さつ子やよもとへ

筆の万年

三五

